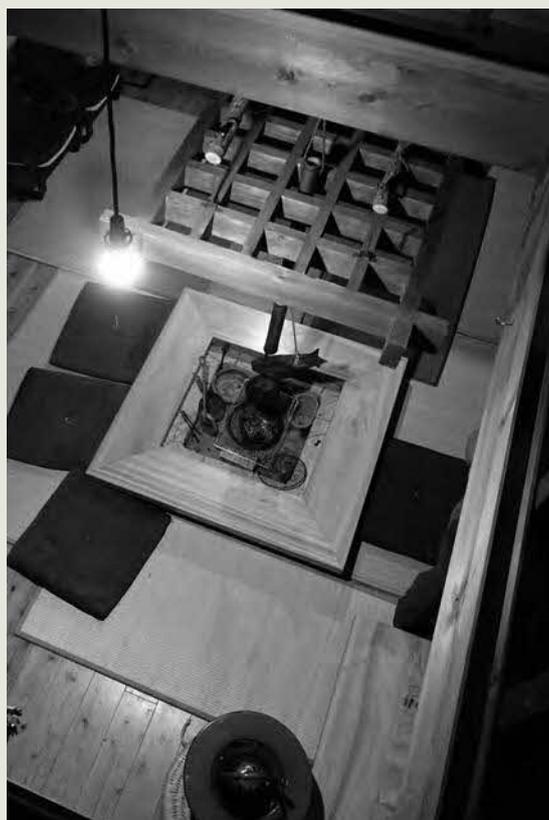




令和3年度農泊地域先進事例調査

農泊先進地域 レポート



令和3年度(2021年度)

熊本県むらづくり課

はじめに

本調査レポートは、熊本県むらづくり課「令和3年度農泊地域先進事例調査等業務」において、令和3年11月から12月にかけて実施した訪問調査の内容をわかりやすく取りまとめたものです。

訪問調査の対象としたのは、教育旅行のパイオニアである大分県宇佐市の「NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会」、同じく大分県臼杵市においてオンラインツアーという個性的な取り組みや海外との交流など新たな活動を行っている地域おこし団体「くらたび臼杵」、福岡県宗像市の沖に浮かぶ大島においてゲストハウスの運営やさまざまなイベント企画を行っている島おこし会社「合同会社渡海屋」の3地域および「株式会社 JTB 福岡支店教育旅行センター」の4箇所です。

「NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会」で農泊の主たる商品スタイルである教育旅行についてその経緯やコロナ禍における現状を学び、新たな取り組みの事例として「くらたび臼杵」のオンラインツアーや「合同会社渡海屋」が行う地域外の若者たちによる起業化について学ぶ。さらに、旅行商品を造成する立場として「株式会社JTB福岡支店教育旅行センター」の意見を聴取するという狙いです。

この調査レポートは、動画版のレポートで映像編集した内容を、より詳しく理解していただけるようとりまとめたものです。

地域外の人々との交流を求め、それによって地域の暮らしの糧を得たり、地域の活性化を図ったりしている農泊の仲間たちがコロナ禍のいま何を考え、何に取り組んでいるのか。そのようなことを動画版と本レポートで感じ取っていただければありがたいと思います。

なお、本レポートの記述方法については、取材担当者が3つの地域をどのように訪ね、どのように行動したのか、その視点で書き起こしてみました。いわば、「紙上の農泊」です。一緒に訪問しているような気分でお読みいただくと幸いです。

《 目 次 》

第1章 調査計画の概要	3
第2章 調査結果レポート	5
1. くらたび臼杵（大分県臼杵市）	6
～コロナ収束後の誘客へ向けて「オンライン農泊」をスタート。 海外からの誘客も含め、臼杵の魅力化を推進中。	
2. NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会（大分県宇佐市安心院町）	20
～教育旅行を中心に25年の経験を持つ、「心の洗濯」の地。 我が国「農泊」の先駆けに見る、学びと新たな取り組み。	
3. 合同会社渡海屋（福岡県宗像市大島）	33
～地域外の若者たちが、神守る島の活性化をめざし起業。 ゲストハウスの開発を手始めに、多彩な企画開発へ。	
4. 株式会社JTB福岡支店 教育旅行センター（福岡県福岡市）	45
～教育旅行の現状とニーズの変化。 ツーリストの視点でみる「農泊」の可能性と課題。	
第3章 調査結果のまとめ	49

第1章
調査計画の概要

1. 農泊地域先進事例調査の目的

新型コロナウイルス感染症の影響により、県内農泊実践地域への来訪者数は減少し、現在も新型コロナウイルス感染症拡大前の水準までの回復には至っていない。

一方で、都市住民においては、田園回帰志向の高まりや、都心に比べ感染リスクが低い農山漁村地域への旅行ニーズの高まり等、農泊の需要拡大の可能性が見込まれており、また、新型コロナウイルス感染症が拡大する状況下でも楽しめるオンラインツアーの実施等、都市部や海外と地方をつなぐ「新たな観光スタイル」が生まれている。

本業務では、新型コロナウイルス感染症により変化した旅行や地方への移住定住等のニーズや誘客手法等を調査・分析し、「熊本県の農泊」の魅力をさらに磨き上げ、県内の農泊実践地域への来訪者数等の向上を図る。

2. 調査計画

(1) 訪問調査の手法

調査にあたっては、農泊事業組織の代表者等へのインタビューと動画撮影を行う。また、その際は宿泊も行い、農泊の宿泊環境や受入家庭の様子、あるいは来訪している観光客などの反応なども取材する。

(2) 調査対象地域の選定

新型コロナウイルス感染症の影響下にある現状で、農泊地域においても活動を休止している地域や域外からの来訪を受け入れない地域がある状況を認識した上で、調査対象地域を九州内に限定し、地域の取材受入意向を確認のうえ、下記4箇所を選定した。

- ◎くらたび臼杵（大分県臼杵市）
- ◎NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会（大分県宇佐市安心院町）
- ◎合同会社渡海屋（福岡県宗像市大島）
- ◎株式会社 JTB 福岡支店 教育旅行センター（福岡県福岡市）

(3) 訪問調査の日程

- ◎くらたび臼杵（大分県臼杵市）
令和3年（2021年）12月8日（水）～9日（木）
- ◎NPO 法人安心院町グリーンツーリズム研究会（大分県宇佐市安心院町）
令和3年（2021年）12月5日（日）～6日（月）
- ◎合同会社渡海屋（福岡県宗像市大島）
令和3年（2021年）11月28日（日）～29日（月）
- ◎株式会社 JTB 福岡支店 教育旅行センター（福岡県福岡市）
令和3年（2021年）11月29日（月）

3. 調査実施機関

受託者 株式会社熊本日日新聞社
訪問取材担当 株式会社エアーズ

第2章
調査結果レポート

1. ^{うすき}くらたび^{うすき}白杵 (大分県白杵市)

コロナ収束後の誘客へ向けて「オンライン農泊」をスタート。
海外からの誘客も含め、白杵の魅力化を推進中。



【白杵市のプロフィール】

▶ 白杵市は、大分県の東海岸、県庁所在地（大分市）に隣接する人口35,127人（2021年12月白杵市推計）の市です。主要産業は農業・水産業や醸造業など。

▶ 白杵石仏（白杵磨崖仏）は平成7年（1995年）に磨崖仏としては日本初、彫刻としては九州初の国宝に指定されており、多くの観光客を集めています。

▶ また白杵市中心街にある白杵城跡や城下町も歴史をしのぶ観光地となっています。白杵城の築城は1562年で築城主はキリシタン大名として有名な大友宗麟です。城下町にはキリシタン大名の歴史が伺われるたずまいが残されています。

▶ 安心院町が「グリーンツーリズム」「農泊」の地として全国的な知名度を高めることで、大分県の各地においてもまたグリーンツーリズム&農泊が盛んとなりました。白杵市も例外ではなく、農泊をひとつの核として地域づくりの活動が行われています。



(1) 「くらたび臼杵」と事務局長・藤沼美和さん

令和3(2021)年12月8日(水)、熊本市から阿蘇を越えて、竹田ICから中九州横断道路を経て臼杵市へ。

この日は鹿児島で農泊に取り組んでいる「ムラたび鹿児島」の皆さんが視察に来られるということで同席させていただきました。視察に合わせて一緒に行動すると、意見交換もできるでしょうと、「くらたび臼杵」の事務局長・藤沼美和さんがセッティングしてくれたのです。

「くらたび臼杵(会長:平林真一さん)」は、臼杵市も構成員として参加している協議会形式の団体として令和元年(2019年)9月に設立されました。「ずっと暮らしたい町へ」をビジョンに掲げ、インバウンド推進や観光客を対象とした体験プログラムの作成などを行っています。「農泊」ばかりではなく、オンラインツアーの開催や広域連携による長期滞在型プランの開発などにも取り組んでおり、長期的な臼杵の関係人口増加や持続可能な地域社会の実現を目的としています。

事務局長の藤沼さんはアメリカ生まれ。子どもの頃はオーストラリア、日本、アメリカで暮らし、大学院卒業後、日本に帰国。関東で暮らしていましたが、東日本大震災をきっかけに九州へ移住。現在は臼杵市で翻訳・通訳・外国人向けツアーガイドなどを本業としながら、「くらたび臼杵」の事務局長を務めています。

ツアーガイドで各地を旅するうちに臼杵市の魅力を再確認。海外に向けて臼杵の情報を発信したいと考えるようになりました。「くらたび臼杵」の設立直後には観光客誘致のためにフランスを訪問。旅行代理店などで手応えを得ましたが、新型コロナウイルス感染症によって成果には結びつきませんでした。現在、コロナ後に活用できるプログラムの開発に向け精力的に取り組んでいます。

今回注目したのは、オンラインツアーの取り組みです。遠隔地の方に臼杵の農泊を疑似体験してもらいたいと企画された「オンライン農泊」や線香づくりを体験する「オンラインお線香づくり」、学校と結んだ「オンライン修学旅行」などのさまざまな体験プログラムのほか、イギリスのケンブリッジ大学の日本学科の学生たちとの「オンライン留学」まで実施されています。コロナ禍ゆえの「オンライン」という技術がどのように活用されているのか、また、それが海外との関係というところまでどのように発展していったのか、ぜひお伺いしたいと考えたのです。



くらたび臼杵 平林会長(左)と藤沼事務局長(右)



事務局長・藤沼さんと臼杵石仏近くのカフェにて

(2) 鹿児島からの視察団とともに臼杵を歩く

「ムラたび鹿児島」の皆さんは臼杵石仏に到着し、藤沼さんのガイドで臼杵石仏ならびに臼杵市の城下町を見学後、農泊家庭へチェックインするという行程で視察。私たちは「ムラたび鹿児島」の皆さんの視察に同行させていただく形で、取材を進めます。

「ムラたび鹿児島」は8軒の農家民宿と4軒の飲食店で構成された団体で、農泊地域として採択されたのは令和2年(2020年)です。「教育旅行からインバウンド事業などビジネスとして実施する農泊への転換を図る」および「田舎を題材にした五感を刺激するツアーを構築するため、ガイドブックに紹介されていない『知られざる鹿児島』を紹介し、未だ観光開発されていない地域に足を伸ばして『ユニークな体験』『地元住民との触れ合い』など、精神的な満足感を重視した農泊を目指す」を目的として掲げています。

今回の視察は、代表である吉村清美さんと妻・英子さん(農家民宿きよちゃん)、ほかに3軒の農家民宿のご主人方3名、アドバイザーも務める旅行会社の方3名、合計8名が参加していました。鹿児島市から臼杵市までマイクロバスで5時間の旅だそうです。

臼杵石仏(臼杵磨崖仏)周囲は公園化されており、年間を通して多くの観光客が訪れています。

臼杵市中心部へ移動し、街なかにそびえ立つ臼杵城跡を見学しました。臼杵城は西南戦争の舞台ともなった大分県の史跡です。

臼杵市の観光ポイントを見学した後、17時に野津中央公民館に移動し、農泊家庭の皆さんと合流。宿所ごとのグループに分かれ、各家庭のご主人に先導していただき、各家庭へ。インターにも近く、それほど山深いわけではありませんが、道が入り組んでおり、すでに日は落ちていますから迎えに来てもらって助かりました。



ムラたび鹿児島の皆さんと藤沼さんの案内で石仏見学



ムラたび鹿児島の吉村代表



国宝・臼杵石仏



臼杵城跡

(3) 農泊家庭「優しい時間」とキーマン・足立完治さん

私たちが泊めていただく農泊家庭は「優しい時間」という名前で、ホストは足立完治さんと妻・佳代子さんです。なお、「優しい時間」の住所は正確には臼杵市内ではなく、隣接する豊後大野市犬飼町に位置しています。

「優しい時間」こと足立家は築70年の日本家屋です。周辺には田畑が広がり、裏手には山。いかにも日本の原風景といった環境に心が和みます。

到着し、母屋の玄関に入って驚いたのは、所狭しと並べられた民芸品などです。佳代子さんに「あっちはもっとすごいですよ」と言われて、囲炉裏のある別棟を覗いてみると確かにすごい。民芸品、バイクのミニチュア、SF映画のフィギュア、陶器、アンティークの家具や電話機、着物、絵画・・・全て足立さんのコレクションで、多趣味ぶり、好奇心、そしてお客さんをもてなすサービス精神があふれています。そもそもこの囲炉裏も、昔は2階建ての高さがあった牛舎を足立さんが一度解体して平屋造りの囲炉裏に改築したというのですから、半端ではありません。

翌日、「くらたび臼杵」メンバーと「ムラたび鹿児島」メンバーとの意見交換会が行われる足立家の裏手の広場も、裏山と畑を使って足立さんが広げたスペースで、キャンプ用具やブランコなどが設置されています。この足立完治さんの好奇心と行動力が「くらたび臼杵」の大きな機動力になっているようです。

夕食は囲炉裏を囲み、足立さんご夫妻と一緒にいただきました。メインは猪肉の煮込みハンバーグ。粗挽きでしっかりと焼かれて香ばしく、猪肉の旨味が満喫できる絶品料理でした。ソースや具材の野菜は自家製です。

足立さんは農家に生まれ、役場で教育関係の役職などを経験した後、農業をやりながら農泊に参加しています。以前は別団体に所属していましたが、令和元年(2019年)9月に「くらたび臼杵」が設立されたのを機に合流しました。農業の方はサツマイモを中心に栽培・出荷して好調だそうです。農泊は新型コロナウイルス感染症の拡大で令和元年(2019年)12月から宿泊者はゼロとなり、取材で訪れた私たちが久々の宿泊受け入れとなったそうです。

宿泊客は子どもから大人、海外のお客さんまで幅広いそうです。

「修学旅行生も多いです。臼杵市の小学5年生が毎年来て



農泊家庭「優しい時間」



「優しい時間」の玄関



牛舎を改築した囲炉裏のある離れ



囲炉裏を囲んで食事 足立完治さんと妻・佳代子さん

くれて、岡山の中学生、大阪の高校生なども来てくれた。

私は畑にひまわりを植えているんですが、ちょうど植える時期に大阪の高校生が来ましてね。そのうちの女子生徒5人をうちに泊めて、翌日畑に連れて行き、『さあ、植えるよ』と言ったら、もじもじしてたけど『靴と靴下脱いで、畑に入っていいですか』と。17、18歳の女の子が畑を20～30分走り回ってね。『18年間、裸足で地面を歩いたこともないし、さわったこともなかった』と言うんですよ。その子たちが帰って行く時、『お父さん、ハグしていい？』と。ハグしながら泣いて。私も感動しちゃって涙が出ました。

学校教育で学ぶことは人生のほんの数パーセント。残りは家庭と社会で学ぶ。子どもたちにとっては学校以外で会う人たちも先生。そんな先生たちから知恵をいただくことが大切なことではないかと思っています」と、足立さんが話してくれました。

臼杵の農泊家庭には海外からのお客さんも多いそうです。もともと足立さんは香港の学生のホームステイ受け入れを20年以上行っています。

「最初、ホームステイの受け入れを決めて家族に報告したら、親父が大反対しまして。なんとか説き伏せてまず一人目を受け入れた。いい子で、今も交流があります。で、彼が帰って行ったら、親父が『次はいつ来るとか？』と(笑)」。

農泊を始めてからも印象深い海外からのお客さんが何人もいます。

「ツアーガイドから、イスラエルのお医者さん夫妻が日本に40日間滞在する予定だけど、ホテル以外の変ったところにも泊まってみたいと要望している、と連絡があり受け入れた。帰国後に旅費を出すからイスラエルに遊びに来ないかと手紙が来ましたよ。感動しましたね。心底喜んでくれたというのが嬉しくて」。

結局、イスラエルには行かなかったそうですが、香港にはホームステイした学生の結婚式出席のために訪問したそうです。農泊の現場では国境を越えた交流が生まれているのですね。

「人との出会い、お金に変えられない心の財産になるので、農泊はやめられない。こんな田舎で国際交流してるんですから。お客さんたちよりも私たち夫婦が楽しんでいきます」と足立さんは楽しそうに語ります。



猪肉の煮込みハンバーグ



足立完治さん

(4)「くらたび臼杵」「ムラたび鹿児島」、意見交換会を取材する

今回の訪問のもっとも大きな収穫は、この意見交換会でした。特に「オンライン活用」と「海外観光客の受け入れ」という私たちもお聞きしたい2つのテーマについて具体的な意見交換が行われました。熊本の農泊地域の皆さんにも参考にさせていただけると幸いです。

1)「くらたび臼杵」の概要と活動(藤沼事務局長より)

「くらたび臼杵」は臼杵の良さをもっと発掘して、なりわいを作り、ずっと臼杵で暮らしていくことができればいいなという意味で立ち上げた団体です。

農泊を通じて臼杵の暮らしを体験してもらうために体験プログラムを作ったり、コロナ禍の中ではオンライン農泊体験などにも取り組んできました。

また、コロナ禍の前には臼杵をプロモーションしようとフランスにも行ったんですが、臼杵単体での売り込みは難しい。「臼杵ってどこ？大分ってどこ？そもそも九州ってどこ？」という感じだし、「日本ってどこ？」という人たちもいますから。

そこで現在、四国の松山空港から入って、愛媛の内子町に泊まって、フェリーで臼杵まで来て、高千穂や阿蘇に行ってもらおうというルートを提案しています。明日も内子町の観光協会長さんが来られて広域連携の話などを予定です。

「くらたび臼杵」ではターゲットを「インバウンド向け、個人旅行者向け」と想定しています。大型の団体旅行だと正直対応ができないところもあって、「田舎の暮らしに価値を置いている人たち」に来ていただきたいと。くらたび臼杵の各農泊家庭には、ご指名いただけるような魅力的な個性がすでにありますから、その個性をさらにより良くしていけたらいいなと思います。

2)オンラインの活用と展開(藤沼事務局長より)

最近「優しい時間」の足立完治さんをメインにオンライン農泊体験もやっています。

オンライン農泊体験というのがどういうものかという、私がネットに接続されたカメラで撮影しながら農泊家庭とオンライン参加者をつなぎ、交流するというものです。実際に足立さんの「優しい時間」で行う時は、まず周辺の山を歩いて、足立さんの「優しい時間」へと移動します。

カメラは「優しい時間」の中に入っていきます。足立さんの趣味のギャラリーを紹介したり、母屋の構造を案内



意見交換会の模様

くらたび臼杵のオンライン農泊の様子



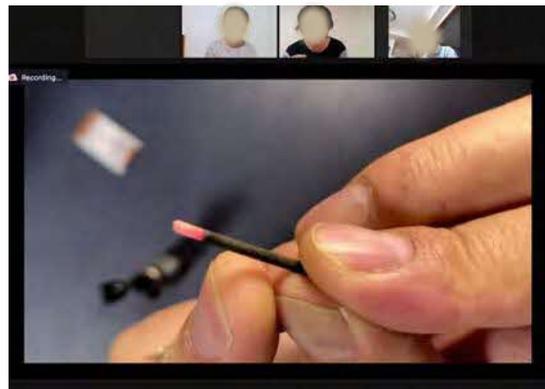
して、「あなたが宿泊する時はここが寝る場所。ここに布団があります。ここは仏壇。トイレはこっち、台所はこっち。ごはんを食べるのはこの部屋」と紹介していきます。

パソコンを通して見ている参加者は各地バラバラですが、お互いに顔も見れるし、写真を見せ合ったり、会話したりします。すると、本当に農泊に来て交流しているような感じで、「足立さんのところに行きたい」となるんです。

オンライン活用プログラムは、農泊以外にも、「オンライン金継ぎ」とか、臼杵市は醸造文化が発達しているので「オンライン醸造ツアー」とか、「くらたび臼杵」の会長(平林真一さん)が仏具屋さんなので「オンラインお線香づくり」があります。オンラインお線香づくりは事前にお線香づくりキットを送り、オンライン当日に「これから1番のお香を焚いてください」と言うと、みんな違う場所ですが、同じ匂いを体験することができます。ただ配信するのではなく、離れていてもつながりを感じられるように、相互間を大事にしています。

こういった活動を続けていたら、こちらから営業をかけたわけではないのですが、大分市の小学校から「オンライン修学旅行を作って欲しい」と言われたり、イギリスのケンブリッジ大学から「日本学科の学生は、日本で1カ月間働かないと単位がもらえない。でもコロナで日本に行けないからオンラインインターンシップをやってもらえないか」と相談があり、実際にオンラインで受け入れました。

また、シンガポール・アメリカンスクールのジャパクラブという同好会から「日本の農泊について教えて欲しい」という依頼があり、学生さん20人くらいと英語でオンライン交流しました。



オンラインお線香づくりのワンシーン



3) オンライン農泊をやってみた感想(「優しい時間」足立完治さんより)

オンライン農泊は令和2年(2020年)7月から毎月やっています。最初、藤沼さんから相談があった時には、経験もないし、「ちょっとできんわ」という気持ちだったんですが、やってみると面白いんですよ。画面の向こうにいるんだけど、目の前にお客さんがいるみたいに感じるし。

いろんな人と交流できて、こっちのことも理解してもらえて、向こうの良さもわかる。先月はシンガポールと交流しました。新しいメディアを使いながらやるのは本当に必要。やってよかったですね。

4)「ムラたび鹿児島」の概要(代表:吉村清美さんより)

昨年度(令和2年度)、立ち上げたグループです。インバウンド事業を発展させたいという目標を持っています。民宿、農家レストラン、直売所など多様な人たちと一緒にやっていくつもりなのですが、なかなか難しいところもあり、研修に参りました。

鹿児島大学が来年度から授業の一環として農泊を取り入れるということになり、その窓口をやることになりました。学生さんたち40名を2回受け入れ、毎年80名が農泊します。これを皮切りに研修を重ねて、海外のお客さんを迎え入れる体制を作っていきたいと思っています。



ムラたび鹿児島 吉村代表

5)インバウンド(海外客)の受け入れについて

インバウンドの受け入れについて質疑が交わされました。ここではそれをダイジェストで紹介します。

藤沼さん(事務局長)「設立時にコロナが直撃したので、『くらたび白杵』はインバウンド受け入れの経験はないのですが、農泊家庭の皆さんはそれまでに豊富な経験を持たれています。質問があれば・・・」。

ムラたび鹿児島「これまで海外のお客さんもあったのですがその方たちは日本語対応でOKでした。外国語対応となると不安です。皆さんはどのように対応されているのですか？」。

足立(完治)さん(白杵)「最初は大変でしたが、今は30数カ国語しゃべってくれる便利な翻訳機があります。田舎にいながら海外の人と交流できて、ヨーロッパ旅行や韓国旅行がちょっとできる気分です」。

神野(徳子)さん(白杵)「国際交流が盛んな立命館アジア太平洋大学と関係があり、アメリカ系、アフリカ系、いろんな国の方たちを受け入れています。言葉は心配でしたが、片言の単語でなんとかできました。身振り手振りで気持ちが通じるのかな。苦労したのは宗教関係。『ごほんよ』と言ったら『いまお祈りの時間です』とか」。

大島さん(白杵)「言葉は身振り手振りで。今度同じ国の人 cameたらこうすればいいやねと、お客さんから学びました。イスラエルの方が『向こうではカエル(フロッグ)を食べる』と言うのを旗(フラッグ)と聞き間違えて。綺麗な奥さんがカエルの鳴き声や跳ぶマネをされてね。それですごく親密になって。だから『わからないことは楽しいこと』だとも思いますね」。

長野さん(白杵)「海外の方は10組受け入れました。ボディランゲージでもスマホの翻訳でもなんとなく通じます。お風呂は『バスルーム』、入っちゃダメなら『ヒア・シークレット』で大丈夫。結構楽しいです。ベルギーの奥様が『習字を習いたい』と言うから、『人』という漢字を手を取って書いて。大事に持ち帰られました。ベルギーに会いに行くと約束したので、コロナが収束したら行きたいですね」。

藤沼さん「私は通訳や翻訳をしているので、まず英語でざーっと説明しますが、『不便なことを楽しみに来たのだから、通訳しないでくれ』と言われたことがあります。『苦労しながら理解していく、その過程が楽しいんだ』という方々が来ているのだと思います」。

ムラたび鹿児島「**民宿やって10年ですが、夫婦とも声をかけるのが苦手です。海外のお客さんとの会話が心配です**」。

神野(洋一郎)さん「構えて迎えるのではなく、普段どおりでいいと思いますよ」。

神野(徳子)さん「同じ年代だったら孫の話とか。リビングに写真を貼っておくと会話が進みます」。

ムラたび鹿児島「**食事や寝具はどうされていますか？家には布団しかないのですが**」。

足立(完治)さん「布団で寝たいとか、箸で食べたいとか、海外の方はおっしゃいますよ。日本に来たら日本を楽しむ、ということだと思います」。

藤沼さん「インバウンドのお客さんは1ヶ月くらい日本を旅する。疲れて『ベッドがいい』という人もいるので、ケースバイケースです。その時は事務局に『ベッドにして欲しい』という情報が入ると思います。農泊家庭としては『うちはベッドはありません』とか自分のスタンスを伝えておけばいいですよ」。

ムラたび鹿児島「**海外客の経験はありますが、車移動の途中で話しかけられたりして、言葉で困りました。なにか良い方法はありますか？**」。

藤沼さん「集合場所で、事前説明されたらどうですか？『うちまでは何分かかります』『コンビニに寄りたいですか』など。あるいは事前説明用のペーパーを1枚作っておくのもいいです。

単語4つか5つくらいで大丈夫だと思いますよ。『マイホーム、30ミニッツ』『トイレOK？ドリンクOK？レッツゴー』『コンビニエンスストア、ユニード？』とか。シミュレーションして、仲間と練習しておくといいかもしれませんね」。

6) ビーガン、ベジタリアン、アレルギーの対応

藤沼さん「対応が大変なのはビーガン。菜食主義の中でも『宗教ではなく、私の主義主張のためです』という方たち。日本人はいったんすべてを受け取ってから取捨選択しますが、欧米では受け取る段階ですでに選択されてないと『なぜだ？』となるケースが多い。また、『私はベジタリアン、ビーガンです。肉は食べません』と言っていた人が『クオリティの高い肉、いい環境で大切に育てられた肉はOKだ』ということもあります。

小麦も厄介です。醤油にも入っているし。小麦に関しては『アレルギーですか？病気ですか？それともあなたの主義ですか？醤油は大丈夫ですか？』と細かく確認します。アレルギーだったら大変ですから」。

ムラたび鹿児島「**深刻なアレルギーなら皿やフライパンまで分ける必要がある。農泊家庭では対応できないケースになれば、宿泊される方の家庭でレトルトを作って持参してもらうといった対応になりますね**」。

足立(完治)さん「旅行会社から性別・年齢・食のアレルギーなどの情報は来ますよ。アレルギーだと命に関わりますから」。

(5) 「くらたび白杵」の皆さんに「農泊」の楽しさと課題について伺う

鹿児島からの視察団が帰途につかれた後、「くらたび白杵」の皆さんに足立家に残っていただき、農泊を始めたきっかけや楽しさなどについて伺いました。まずは、きっかけから。

1) 農泊を始めたきっかけは？

神野さん「10年くらい前、この地域で修学旅行を受け入れるにあたってキャパが足りないということで頼み込まれて。最初は断ったんだけど、やってみたらハマってしまいました。人とのふれあいが刺激になるし、『私の地元ってこんなにいいところなんだ』と他所の人から教えられます。それが、私が『これをしなくちゃ』と思った一番の理由。修学旅行の子たちが泊まった時、うちの親が昔の林業や炭焼の話をしてくれたんですが、そんな話、私も聞いたことがなかった。農泊で父母の苦勞を初めて知ったんです。土地に対する愛着や受け継ぐ気持ちに気付かされました」。

大島さん「私も『キャパが足りない』と頼まれて。ずっと断ってたんだけど、修学旅行の子どもたちから学ぶことがいっぱいあってね。私たちが当たり前だと思っていることを『わーすごい！』と喜んでくれて」。

足立(佳代子)さん「うちは先に香港の大学生のホストファミリーを始めていたので、それがきっかけです。主人が決めてきて、家族は反対。ところが最初の子たちがすごくいい子で、帰った後で『お母さんのごはんを食べに行きたいです』と電話や手紙が来ました。一番反対していた父も『次はいつ来るんか』と言い始めて、やってよかったなあと。だから農泊を始めることには抵抗感はなかったですね」。

2) 農泊の楽しさとは？

大島さん「あるお客さんを仏間にお泊めしたことがあってね。翌朝、『よく眠れましたか？』と聞いたら『大島さんのご先祖様が見守ってくれたのでよく眠れました』と。そんなこと言ってくれるんやと、泣きたくなるくらい嬉しかったです」。

神野さん「うちは92歳の母が認知防止でマフラーを編んでいるんですけど、お客さんに『これ使ってな』と渡している。外国からのお客さんに着物の着付けをしてくれたり。お客さんが喜んでくれると、母も私もうれしい。家族の持ち味を何も捨てることなく披露できるところがいいですね」。

長野さん「外国からのご夫妻がとっても喜んでくれた。何も無いところなのに、『石垣がきれいだね』『静かがいいところだね、空気が澄んでるね』と」。

足立(完治)さん「自分たちが楽しまないとお客さんも楽しめない。こちらにとっては当たり前の自然がお客さんたちにはご馳走になるとか、気づかせてくれる。肩の力が入っていないおもてなしをしたいですね」。



右から 神野さん、大島さん、足立佳代子さん



右から 足立完治さん、一人おいて、藤沼事務局長、長野さん



右から 足立完治さん、藤沼事務局長

3) 農泊で出会い、つながっていく仲間たち

農泊家庭のお母さんたちの話を聞いていると、仲がいいし、チームワークの良さも伝わります。以前からの付き合いかと思ったら、実は農泊を始めたことによって知り合ったのだといいます。

足立(佳代子)さん「農泊が混んでくるとパニックになりそうに。そんな時には大島さんから『何を言うとの。そげんこと言うとつまらんよ』とハツパがかかります」。

大島さん「誰かが言ってあげないと。世話焼きお婆さんの役目ね。一つずつ片付けていこうや。自分もしっかりせなんし。本当に仲間が一番やからね。同志というかね」。

神野さん「料理を一緒に学ぼうとか、顔を合わせる機会を時々作って。そういうので仲良くなりましたね」。

足立(佳代子)さん「農泊という同じ目的があって、私たちは料理勉強会を開いたり、父ちゃんたちは酒飲んで語り合ったり、コミュニケーションを取っていきました」。

大島さん「みんな年を取るから。足が弱ってくるのは自分たちもわかるし、助け合いが力になるのはすごく感じます。それぞれ刺激を受け合う、集まるって本当に大事」。

藤沼さん「向上心のあるメンバーが集って、仲良くなって、切磋琢磨していかれていますよね」。



神野さんの農泊家庭「へもどつき亭」



大島さんの農泊家庭「若水」



長野さんの農泊家庭「ケ・セラ・セラ」

4) 農泊と料理

農泊では地元の料理も大きな楽しみ。くらたび白杵のメンバーも、試行錯誤を繰り返しているそうです。

神野さん「テレビで得る知識と地元の人たちの腕や経験はまた別物。だから味が違ってくる」。

藤沼さん「ジビエのハンバーグも大島さんが試行錯誤して開発し、その完成形を私たちが習っています」。

大島さん「主人が猟をするので。私は嫌だったけど、どうせ獲るんだったら美味しくしてあげんといかん。試行錯誤して美味しい料理にせんと、ジビエが広がらんと思ったんですよ」。

神野さん「大島さんが美味しい料理を作るまでは、猟師さんが獲ってきて焼いてワイワイ焼酎を飲んで、あの匂いしか知らないから、『猪は食べられない』という人が多かったんですよ」。

大島さん「粗末にしたらもったいない。美味しいのができて、『食べにおいで』と誘って、意見を聞きながら試行錯誤。料理研究家じゃないけど、せっかくですから。ジビエも野菜も粗末にはできません」。

神野さん「だから野菜を作るのも楽しみになってきた。農泊は料理を食べた人の表情とか声とかわかる。それも農泊の楽しみね」。

大島さん「昨夜、『料理、どうでしたか?』と聞くと、『見たらわかるでしょ。お皿が空になってる』と、『臼杵に来てよかった』と言われて。コロナでしばらく泊まる人がいなかったから」。

5) オンライン農泊のやり方

鹿児島視察団との意見交換会でも話題になったオンライン農泊について、重ねてお伺いしました。

藤沼さん「農林水産省の農山漁村振興交付金をいただいてインバウンドを推進する計画でしたが、コロナで一切できなくなって。コンサルの方から『オンラインツアーというのがあるよ』と教えてもらった。しかし、くらたび臼杵のメンバーは『いやいや』と乗ってくれない。徳島のゲストハウスで似たようなことをされていたので、まずそこに足立さんと参加してみたら、『これならできそうな気がする』と言ってもらえて。それで足立さんに頼み込んでモデルになってもらった。

まずホストである足立さんの良さを引き出すために、足立さんの聞き取りをやりました。そして、裏山から見せて、母屋のギャラリー、農泊する部屋を案内し、ごはんを食べながら語り合うという流れを作った。最初は無料モニターで千葉の大学生向けに行った。すごく反響がありました」。

足立(完治)さん「徳島のオンラインツアーに参加したら、徳島に行ってみたくなったんですよ。この力はなんだろうと思った。俺にも『臼杵に行ってみよう』と思わせられるのかなと。

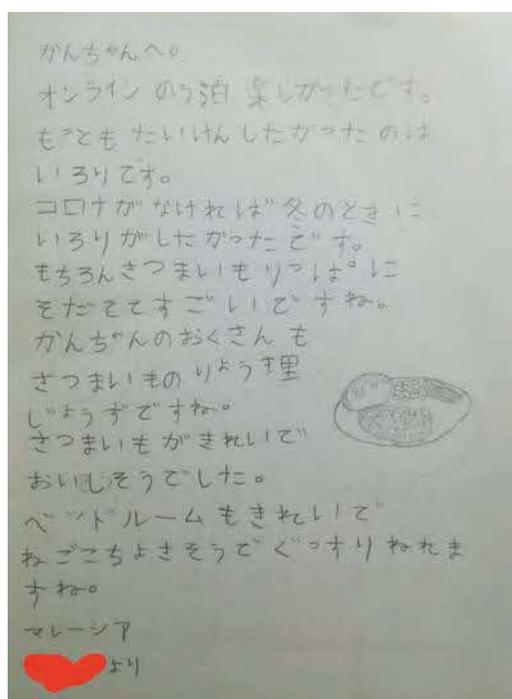
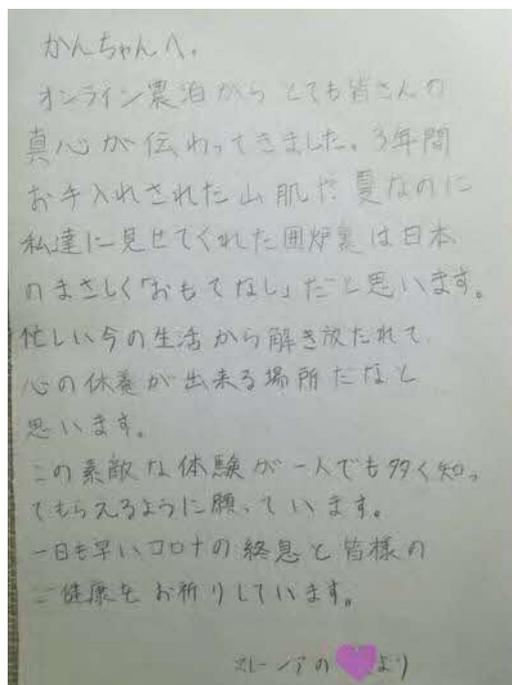
これまで10数回やりましたが、自然な気持ちで話せば伝わるのかなと思うようになりました。『足立さんの所に行ってみよう』という感想が聞けるので。

最初は拒否したんですが、一步踏み出したら新しい世界が広がるし、新しい人と知り合うことができますからね。この歳になっても、踏み出すことが大事な」。

藤沼さん「マレーシアの日本人とのハーフの子たち、高校生たちがオンライン農泊に参加してくれて、手紙を書いてくれるんですよ。完ちゃん(足立さん)のところに行きたいという感想ばかりで」。

足立(完治)さん「囲炉裏は珍しいみたいで、『囲炉裏を体験してみたいです』という感想が多い。私のこだわりの1つであるので、オンラインで紹介して、お湯を沸かすシーンも見せてますね」。

マレーシアからのお便り



藤沼さん「オンライン中継を始める30分前には火を入れる。カメラを持って案内して、ちょうど囲炉裏に来た時に焚き木がパチパチ、お湯がシュンシュン。『ほら音が聴こえる？炭が赤くなってるの見える？』と、リアルな感覚を伝えられるのがオンラインのいいところですね。

サツマイモの収穫を体験するオンライン収穫というのもやってみました。収穫風景を中継しながら交流し、その時に収穫したサツマイモは後日届けられる。反応はよかったけど、サツマイモの追加オーダーはまだですね。そのリピーターづくりがこれからの課題です。

ただ、いろんな種類のオンラインツアーに参加して来られる白杵ファンのような方もいらっしゃいます」。

足立(完治)さん「オンライン農泊は白杵の宣伝というだけではなくて、交流の場でもある。私が参加した時に、そこに行ってみたい、会ってみたいと思ったのも、単なるオンラインで繋がっているという感覚じゃなくて、一步踏み出して行動を起こしたいという気持ちになった」。

藤沼さん「オンラインツアーじゃなくて『オンライン交流』です。双方向のクイズを出したり、お互いに自己紹介や写真を見せ合ったり。まさに交流の楽しさですね。

告知はピーティックス (Peatix: 国内外のイベントが集まるサイト。オンラインイベントの集客に強い) を使っています。いろんなサイトがあるんですが、今のやり方だとピーティックスくらいでじわじわくらいがちょうどいいかな。

オンラインと聞くだけで『イヤ!』という人は一定数います。まずお客として参加してみても面白そうだったら・・・とステップバイステップで進めるのがいいですね」。



「優しい時間」の囲炉裏



オンライン収穫のワンシーン



ピーティックスのサイト

6) これからの課題

神野さん「『連絡はITで』ということになって、スマホとかLINEとかの使い方を藤沼さんから教えてもらいましょうと、いま研修を始めているところです」。

藤沼さん「最終的には自分たちでZOOMを使えるように。みんなでオンラインの仕方も学んでいきましょうと」。

事務局としての課題は集客で、オンラインなどで探っているところです。農泊だけで誘致するというよりも、県単位でいろんな資源をつないでいくのが理想的なのかなと。観光客が大分県の中を見て回りたいと思った時に『白杵にはこういうものがありますよ』と提示できればと思います」。

足立(完治)さん「受け入れる農泊家庭である我々の課題は、モノマネではなく自分たちの個性をいかに出すか。『くらたび白杵に来たらこんなことができるよ、行ってみようや』となれるように」。

事務局としては内子・臼杵・高千穂を連携させるという構想があるので、自分たちもその構想に乗っかりながら、『四国も良かった、臼杵も良かった』と思えるものにしていきたい。それには個性が必要ですね。」

(6) 城下町臼杵に、くらたび臼杵の平林会長を訪ねる

臼杵での滞在時間ももうわずかとなりました。すでに日も傾きつつあります。できれば今回お忙しくてタイミングが合わずインタビューできなかった「くらたび臼杵」の会長、仏具店「山本鳳凰堂」の代表取締役・平林真一さんにもご挨拶をしておきたい。併せて、前日に時間がなくて見学できなかった臼杵の城下町も観てみたい。ということで、最後に臼杵市中心街に向かいました。

坂のある石畳の界隈に、いくつもの大きな寺院や武家屋敷が軒を連ねており、九州の雄藩であった大友家中の佇まいを感じることができます。

夕景の中、商店街にある山本鳳凰堂をお訪ねし、平林会長にご挨拶をしました。短い時間でしたが、平林会長の「臼杵の街を守りたい」という気持ちが、「くらたび臼杵」のコアとなっていることを感じ、臼杵市を後にしました。



仏具店「山本鳳凰堂」



くらたび臼杵会長の平林真一さん



夕暮れの臼杵城下町

2. NPO 法人

安心院町グリーンツーリズム研究会 あじむまち うさし あじむまち (大分県宇佐市安心院町)

教育旅行を中心に 25 年の経験を持つ、「心の洗濯」の地。
我が国「農泊」の先駆けに見る、学びと新たな取り組み。



[安心院町のプロフィール]

▶ 安心院町は大分県北部の宇佐市にあります。宇佐市は国東半島の付け根あたりに位置する人口52,771人(21,984世帯※2020年国勢調査)の市で、大分市や別府市とも交通の利便性が良く、北九州市との行き来もしやすい立地です。

▶ 全国4万社余りの八幡宮の総本社・宇佐神宮があるほか、アフリカンサファリ、大分県立歴史博物館などに年間多くの観光客が訪れる観光都市でもあります。

▶ 安心院町はその宇佐市の南東部に位置する中山間農業地域です。2020年国勢調査によると人口は5,517人(2,340世帯)。2020年農林業センサスによると総農家数は783戸。安心院盆地平坦部などでの稲作と台地部におけるぶどう栽培を中心に、畜産、花き、野菜などを加えた複合経営が行われています。



(1) 安心院町へ

令和3年(2021年)12月5日、安心院町グリーンツーリズム研究会(以下、「安心院町GT研究会」)をお訪ねしました。熊本市から大分県宇佐市安心院町までは車で約2時間30分。九州自動車道を熊本ICから鳥栖JCTまで北上し、大分自動車道へ。午前11時に安心院町に到着しました。

安心院町GT研究会の事務所で宮田静一会長にお会いする午後2時まで、安心院町の雰囲気を見て回ることになりました。まずは「安心院葡萄酒工房」へ。名産であるワインの醸造所や販売所のほか、レストランもあり、大型バスが入れる駐車場があります。また、葡萄酒工房のすぐ上には町が眺望できる展望所もあります。

「杜のワイナリー」という看板がある工房は、森の中に建物をつなぐ歩道が散策路のように配置されています。ちょうど紅葉が見事でした。販売所では多くの種類のワインが並んでいます。レストランにも大型バスが停まっており、団体の観光客が食事を始めていました。話しかけてみると、北九州市八幡東区の町内会の方々でした。

宇佐市は古くから北九州市とは近い関係にあったようで、観光でも仕事でも交流があるそうです。特に高度経済成長期においては八幡製鐵所や国鉄の関連企業が大きな雇用力を持っていました。安心院町の農泊家庭にも、就職は北九州で、定年退職後に安心院に戻ってきたというご主人たちがいらっしゃいました。

展望所に登ると、遙か南に由布岳や鶴見岳、くじゅう連山を望み、眼下の安心院町は山々に囲まれた盆地であることがわかります。近隣の家族の他に福岡の大学生のグループも遊びに来ていました。ドライブがてら、特に目的もなく来たという話でした。大分と福岡・北九州の距離感の近さにあらためて驚きました。

昼食後、安心院町GT研究会から車で10分ほどの「饅絵(こてえ)通り」を歩いてみました。短い街並みのあちらこちら、個人宅の壁や戸袋などに恵比寿、大黒、竜虎などの饅で描かれたレリーフが施されています。説明パネルを読むと、多くが100年以上前のものです。小グループのシニア男性たちがガイドさんの説明を聞きながら見学されていました。印象に残ったのは細やかな説明看板と駐車場に立てられた「観光客優先」の看板です。



安心院葡萄酒工房



展望所からの安心院町の眺め



饅絵通り

(2) 安心院町グリーンツーリズム研究会・宮田会長インタビュー

午後2時、安心院町GT研究会の事務所に宮田静一会長をお訪ねし、インタビューさせていただきました。

研究会の事務所前には、「心のせんとく グリーンツーリズム発祥の地 安心院町」というレリーフの記念碑が建てられています。記念碑の裏側には、「研究会のあゆみ」と「研究会の基礎となった専門部活動」が刻まれており、専門部活動の企画開発部には今日宿泊させていただく「百年乃家ときえだ」の時枝仁子(まさこ)さんのお名前も見えます。

会長のお話は海外での体験から農泊をめぐる法整備やメディアの話まで多岐に渡ります。ここでは要点を整理して、簡潔に掲載します。

1) 安心院町GT研究会は「農村の危機」から始まった

大分県安心院町は昭和41年(1966年)に国営農地開発事業によりブドウ栽培を発展させました。1970年代にはブドウ農家350軒、栽培総面積350haとなり西日本有数の産地を目指すに至りましたが、その後、農家数も栽培面積も半減、先行きが危ぶまれる状況を迎えます。そのような中、「ブドウの灯を消すまい」を合言葉に平成8年(1996年)に発足したのが安心院町GT研究会でした。農泊発祥の地として知られる安心院町GT研究会ですが、その出発点は「農村の危機感」であったということは重要です。

同年には第1回ヨーロッパ研修にでかけており、ここが安心院町GT研究会の起点だと言えるでしょう。

平成16年(2004年)にNPO法人化されて現在の組織構成となり、翌平成17年(2005年)には(財)日本修学旅行協会との提携によって本格的な教育旅行の受け入れを開始するとともに、現在も続く人材育成の場「グリーンツーリズム実践大学」を開校しています。平成8年(1996年)の起点から約10年かかって、安心院町GT研究会の現在に至る体制が整えられました。

これまで修学旅行や体験旅行などの教育旅行を25年間受け入れた経験を持ち、新型コロナウイルス感染症が感染拡大する前には、年間9,000人~10,000人もの方を受け入れるまでに成長してきました。

2) 「農泊」は安心院町GT研究会が商標登録していた言葉

「農泊発祥の地」という表現ですが、事実、「農泊」という名称を考案し、商標を取得したのも安心院町GT研究会です。もともと「民泊」という言葉が使われていたのですが、マンションなどの空き室を活用した宿泊



グリーンツーリズム研究会事務局
事務所の前には記念碑が建てられ、裏面には年表が刻まれている



事務局内部と宮田静一会長

施設も「民泊」と呼ばれるようになり、混同を避けるために、宮田会長らが「農家民泊」だから「農泊」という言葉を考え、商標登録もしておこうということになったそうです。

さまざまな経緯があった後、平成28年(2016年)に農林水産省に伝える形で「農泊」商標の専用使用権の設定に同意し、このことが現在「農泊」が一般化した要因となっています。

3)「農泊」の出発点、ドイツの農村に学んだこと

「津端修一先生が『現代ヨーロッパ農村休暇事情』という本を書かれて、津端先生を呼んできたのが最初ですね。湯布院のシンポジウムで知り合い、安心院で講演をしていただいた。印象に残っているのが、オーストリアでは旅行者の7割が農村で休暇を過ごす。津端先生が『嘘か本当かヨーロッパに観に行ったらいい』とおっしゃるので、行きました。平成8年(1996年)11月、第1回のヨーロッパ研修ツアーです。希望者が月々4,000円ずつ積み立て、自分のお金で参加するもので、平成29年(2017年)の第17回まで続いています。現在はコロナで休止していますが」と宮田会長は言います。

ヨーロッパで、宮田会長たちは日本とはまったく異なる農村のあり方にショックを受けます。

「ドイツのフォークトブルクで、市長さんに『どのくらいの方がグリーンツーリズムに関わっていますか?』と聞いたら、『100%ですね』と。

ドイツの人たちは長い夏休みのために日々を頑張る。いま、宇佐市だけで空き家が3,500軒あると聞くけど、1割でもいいから復活させたい。だから私は農泊とバカンス法はセットだと考えているし、バカンス法成立に向けてこれからも国に働きかけていきます。事務所の前の石碑の裏に年表、下の方に空欄がありますね。あれは『バカンス法成立』って刻むために空けてあるんですよ。

安心院町の取り組みはメディアの注目を集めます。平成14年(2002年)にはJR九州と、平成17年(2005年)には日本修学旅行協会との提携などが進み、年間9,000人～10,000人を受け入れるまでに成長していきました。



第16回ヨーロッパ研修旅行の様様

第16回ヨーロッパ研修旅行の参加者募集チラシ

2017年

第16回安心院グリーン・ツーリズム研究会 海外先進地研修!

ドイツ グリーンツーリズム研修旅行

- ◆ 旅行期間：2017年12月10日(日)～12月17日(日) <8日間>
- ◆ 参加人員：15名位 (若少旅行人員：10名)
- ◆ 募集締切：2017年9月29日(金) (但し、定員になり次第、締切りします)
- 旅行代金：〈期間空滞費等、お一人当たり〉220,000円
- ※ 燃油サーチャージ(日空より2017年8月10日現在)は旅行代金に含まれていません。また、国内空港乗降料・旅費安サージス料及び、海外空港乗降料が別途必要(現時点は21,450円)となります。
- ※ 7名1室料用(宿泊費)を予定しております。
- ◆ 特別案内：現地でごまかれない食事代などは概ね一人3万円程度となります。
- ◆ 添乗員として過去15回の本ツアーに同行した二階洋行に案内します。

※ 募集状況については、厚生労働省「観光振興情報」ホームページ <http://www.forth.go.jp/> でご確認ください。また、当該情報については、外務省海外安全ホームページ <http://www.mof.go.jp/> で確認ください。

<企画書からのご挨拶>

昨年と一昨年の研修旅行は欧州でのコロナの影響が深刻化していたので実施できませんでした。今回は、ドイツ・フランスの訪問になりますが、ドイツ農村体験型の地で宿泊研修することに加え、ドイツとフランスの村づくりを具体化した「わが村は美しく」や「フランスの美しい村」を訪問する企業と熟しました。これらの取組を訪問することで、農山村の持続性に成功している状況を見て、私たちが将来的な視点でなに行っていくかを研修すると共に、欧州の持続的農村の中で、農村体験の利便性について教養を学びながら、実際に体験してみようと考えています。また、研修の機会ですので、沿道にある有名な観光地もめぐり、感懐への配慮なども見学するほか、ドイツの農業をある意味で支えているクライン・ガルテンも訪問する予定です。また、丁度クリスマス・マーケットの時期ですので、この見学も興味深いものがあります。




旅行企画・実施 **15歳日本サーガ**
福岡支店 **安心院グリーンツーリズム研究会**

4)「農泊」「教育旅行」は日本の農村の大きな役割

宮田会長は「農泊は『第3の教育』だから」と話します。「家でもない、学校でもない、他人の家に泊まる第3の教育の場。子どもたちが変わるんです。今の子どもたちは人間不信の環境の中で暮らし、他人を信用しちゃいけない、と教えられる。でも、農泊に来ると自然体でいられる。自己を肯定できる。

安心院は北九州からの修学旅行が多いんですが、10年連続で来られる学校が10校以上ありますよ。農泊は子どもたちのためにもやった方がいいと思いますね。奈良の大仏は『またおいで』とは言ってくれませんかからね。私たちは『困ったらまた来るんよ』と声をかける」。

安心院町GT研究会の看板や石碑には「心のせんたく」というキャッチフレーズが書かれています。私たちも実際に安心院のご家庭で泊めていただきましたが、田舎の実家で過ごすのと異なる、地方のホテルで過ごすのでもない、独特の心地よさがあります。この心地よさに子どもたちも大人たちもひと時の解放感を見出すのかもしれない。

一方、宮田会長は農村にとっても「農泊」は大事だと語ります。「人とのふれあいが難しくなり、ストレスが高まると、農泊のニーズはさらに高まっていくと思います。農泊は、小さいけれど成長産業だと思えます」。

また、「農泊」は過疎化していく農村にとって、関係人口を増やすという意味でもその意義は大きいのは確かです。安心院には「親戚カード」というものがあります。1回泊まるごとに印鑑をもらうスタンプカードですが、そこには「一度泊まれば遠い親戚、十回泊まれば本当の親戚」と印刷されています。実際に10回以上来訪された方も何人もいるそうで、中には多額の寄付(事務所の建設に)をされた方もあるとのこと。まさにファンがリピーターへ、そして親戚以上の深い関係へとつながっていったということでしょう。

5)「農泊」は地域おこしを超えて仕事に。だからルールがある

「最初は地域おこしから始まった農泊ですが、すでに地域おこしの域を超えて、仕事として取り組むことが必要だ」と宮田会長は語ります。そのため、訪問客の受け入れ対応についてはルールを定め、受け入れ家庭に対して指導を行っています。

宮田会長の著書「農泊のススメ」には、受け入れ対応のルールを「農泊の極意(農泊を始める方へ)」として43項目が紹介されていますが、そのうちいくつかピックアップします。

【農泊の極意】

◎農泊はリレーでつながり続けるコツ

宿泊客を家族全員で出迎え、食事も家族全員が同席、見送りも家族全員で・・・は実は息苦しく負荷も大き



安心院町GT研究会の農泊風景



親戚カード

い。出迎しも食事もリレーでつなげばよい。見送りは家族全員で。

◎暇と余裕が農泊の資格

忙しい時でも忙しくないふりを。田舎にゆったりと心のせたくをしに来た人に「忙しい時にすいません」と気遣いさせないように。

◎「これ、明日も出してください」を真に受けてはダメ

対価をいただく宿泊業で昨日の残り物を出すなど厳禁。家庭的な雰囲気になされると大きな問題に発展する。同じ料理を提供するなら、新たな物を。

◎田舎にいても知的でオシャレに

農泊は田舎が舞台だが、田舎者ではこの仕事には向かない。田舎のイメージを超える工夫がなければ次はない。

「極意」はこのように続きますが、いずれも「対価をいただき、予約していただく以上、農家のありのままがいいという甘えは許されない」という考えが基本にあります。多くのリピーターを育ててきた安心院町GT研究会の秘密がここにあるように思えます。

特に大事な項目が「熊本の農泊地域の方たちに何かアドバイスを」と尋ねた時に、宮田会長から語られました。「よくうちの皆さんに言うことがあるんですよ。一つが『苦情、失敗、よかったことを共有せよ』、二つ目に『決して陰口は言わない』、そして三つ目に『一流に学びしっかり勉強しよう』と。悪口を言う人のところに人は来ない。みんなが仲良く力を合わせる事が大事ですね。そんな自分たちになるためには勉強して成長することです」。

6)小国に学んだ「GT実践大学」は実現までに10年

「一流に学びしっかり勉強しよう」を形にするために、安心院町GT研究会では平成17年(2005年)から「グリーンツーリズム実践大学」という学びの場を開催しています。多い時には年に5回、文化人の講演会と料理などの実習会などをセットにするケースが多かったようです。

この実践大学、実は発想のもとには熊本県小国町の「九州ツーリズム大学」でした。

「安心院町GT研究会を立ち上げて間もない頃、私も小国町に伺いました。こういう学びの場を作りたいと思った。でも、まだうちではできないなというのが実感。それで、『人を貯金しよう』と思った。先々で知り合った人たち

未来ある村日本農泊連合 未来講座
(第15期 大分・安心院グリーンツーリズム実践大学) 8月開催

2019年
8月31日 14:00~15:30

会場：宇佐市役所院内支所多目的ホール (大分県宇佐市内町山崎39)
受講料：800円 (高校生以下は500円)

「農林漁家民宿おかあさん100選」が語ります」

【内容】
「農林漁家民宿おかあさん100選」とは農林水産省と観光庁との連携事業(平成19年~21年)で、農林漁家民宿の品質の維持・向上を図るとともに、イメージや実態を広く国民に理解してもらうため、地域のオピニオンリーダーであり、自身の長年経営に成功し、地域活性化に寄与している「農林漁家民宿おかあさん」を選定するものです。
今回はそんな「おかあさん100選」に選ばれている3名のお母さんにおもてなしの心得や農泊の魅力について語っていただきます。

舟橋晋はなしの家 中山 五十子 氏 (大分県・安心院)
百原乃家ときえ荘 寿枝 七子 氏 (大分県・安心院)
ネーグニョウタン 豊岡有希の郷 豊岡 雅子 氏 (大分県・山崎)

【コーディネーター】
星月 雅子 氏 (NPO法人大分県グリーンツーリズム研究会 事務局長)

【お問合せ申し込み先】
NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会 TEL 0978-44-1158

主 催：未来ある村日本農泊連合・NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会
後 援：NPO法人大分県グリーンツーリズム研究会

**第16期 大分・安心院
グリーンツーリズム実践大学**

2020年
10月19日 14:30~15:30

会場：宇佐市役所院内支所多目的ホール
(大分県宇佐市内町山崎39)

受講料：無料

「宇佐の井手の歴史」
平田 崇英 氏
(観光等任務・豊の国宇佐市長 助任)

県下最大級の産地である宇佐平野。その産地帯を支える井手の歴史を豊の国宇佐市長の平田先生にお話いただき、宇佐の歴史の理解を深めていきましょう。

【プロフィール】
昭和23年12月7日 宇佐市生
昭和46年3月 豊後大学文学部仏教学科卒業
昭和53年5月 財団法人教育振興会理事
昭和54年8月 祖父(現在の理事長)後継取得 大分県男性1号
平成11年6月 浄土真宗本願寺派教団主任職等

(豊の国宇佐市歴の活動)
昭和62年9月より 地域づくり団体 豊の国宇佐市長 助任代表
昭和63年10月「歴史村一の世界」
平成元年11月「政経山の世界」
平成3年2月「宇佐市歴史館の世界」

【新型コロナウイルス感染症防止策について】
新型コロナウイルス感染症防止のため、消毒済の設備・会場内の換気等の対策を取ったうえで実施いたします。
※当日はマスク着用をお願いいたします。
※発熱・咳等の症状がみられる方は、ご参加をお控えください。

【お問合せ申し込み先】
NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会 TEL 0978-44-1158

主 催：NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会

実践大学の参加者募集チラシ



実践大学の開催

といい友達関係を作る。グリーンツーリズム大学を立ち上げた時に協力してくれる人脈をつくるためです。地域内の人だけでは知れてます。外の知見のある人たちを呼んできて、内容を膨らませていかないと。実際に立ち上げるまでに10年かかりましたね」。

7) 新型コロナウイルス感染症の影響と対応

新型コロナウイルス感染症の影響により、安心院町も大きなダメージを受けています。会長によれば「コロナ前の受入人数は、教育旅行が子どもたち年間約7,000人と大人2,000人、加えて各地からの視察旅行が約1,000人で合計約10,000人あったけど、このコロナ禍の2年間はその1割以下です。9割以上ダウンしてしまいました」。

客数の減少はそのまま減収となり、それは2つの現象につながっています。

ひとつは事務局機能の低下です。3名の正職員(常勤)で事務局業務を担当していましたが、1名に減らし、不足する場合は臨時のパート職員で補うことにしました。

もうひとつは受入家庭の減少。ピーク時に80軒あった受入家庭が現在約50軒。このままだと40軒にまで減少しそうです。宿泊の予約が入らないので収入が見込めず、アルバイトに出たりするためです。

訪問した令和3年(2021年)12月の時点では、翌年の農泊予約がコロナ前の7割ほど入っているということでした。それではキャパシティが不足するため、安心院町GT研究会では「受入家庭の新規募集」を行っています。「特にこの4~5年、役場の方でも力を入れて募集告知を行ってもらった。増えていますが、減る方が多いんですよ」。

「事務局機能の回復」も「受入家庭の増加」も、まずは新型コロナウイルス感染症の終息が前提となります。令和4年(2022年)初頭、再び感染が拡大しており、せつかく回復基調に合った予約状況も先行き不明です。

8) 新たな取り組みへ ~スッポン料理実習会とリゾートホテルとの提携~

インタビューの翌日の「スッポン調理実習会」は、私たちも取材させていただきました。新型コロナウイルス感染症により開催休止していた「グリーンツーリズム実践大学」久々の開催。農泊家庭メンバーたちの学びの場です。

スッポンは安心院の特産品ですが、これまで農泊家庭では提供していなかったとのこと。「実は、これまで遠慮していたんです」と宮田会長は言います。農泊事業は既存の宿泊業者や飲食業者との軋轢が起きやすいので、競合を避けてきたとのこと。

「しかし、コロナのために、遠慮していたら農泊そのものが倒れてしまう。安心院名物のスッポン料理が提供できるなら高額商品ですから、農泊家庭の利益も大きい。また、教育旅行は子どもたちがターゲットですが、スッポン料理なら大人へとターゲットを拡大することも可能です」(宮田会長)。



事務局入口に貼られていた農泊家庭募集ポスター

もうひとつ、コロナ禍での新たな取り組みについてお聞きしました。それは、城島高原ホテル(別府市の城島高原オペレーションズが運営)との提携です。「城島高原ホテルさんから声をかけていただきました。城島でホテル1泊、安心院で農泊1泊。ホテルと農泊と一緒に宣伝しよう。私も同じことを考えていたのでありがたいです。すでにスタートはしていますが、今の状況で待っていても予約は入りません。東京に営業に行こうと計画しています」(宮田会長)。

農泊の老舗である安心院町GT研究会ですら、大きなダメージを受けており、これまで抑制していた展開を模索されています。そこには下記のような3つの狙いがあると思われます。

- ①ターゲットや営業領域を拡張する(子どもから大人へ、宿泊から料理提供へ)
- ②単価・利益率の向上(高額商品の導入)
- ③他業態との提携による営業力・情報発信力・ネットワーク力の強化

9)これから「農泊」を始めようとする皆さんへ

「子どもたちにとっての農泊のニーズは、安心院が農泊を始めた25年前と変わっていない。むしろ高まっているかもしれません。農泊など教育旅行は、農村の大きな役割だと思いますよ」と宮田会長は語ります。

「いろんな地域から視察に来られて、『うちにはなにもない』とおっしゃる。私は『あんたがいるじゃないか。あんたが頑張れよ』と言います。農村には観光地のようなものはないけれど、リーダーが出てきて『やろう!』と地域をまとめたら売れる地域になれると思う」。

行政の役割についても話が及びます。「最初は、地域だけでは難しいかもしれない。安心院では最初は県の方が『勉強会をしよう』と声をかけてくれた。それがなかったら、この活動は生まれてなかったかもしれません。行政と連携できるといいなと思いますね」。

会長自身のことについてもお聞きしました。「私は安心院の人間ではありません。近くの長洲町という港町。熊本にも同じ地名がありますね。安心院の人からすればよそ者。でも、よく言うじゃないですか。『よそ者、若者、馬鹿者』って。だから、皆さん、よそ者を大事にしてください」。

発祥の地
農泊でスッポン料理を堪能しよう
 ーしとパワーをー!!

農泊発祥の地安心院町は水が豊く日本におけるスッポンの三大産地とされ、昔から民家でも食卓に上がっていました。今では日本有数のスッポン料理のお店が軒を並べ、そしてスッポンの養殖場もあります。毎年定例の博多の中学校の体験学習でスッポンの取組も行いました。

農泊も発祥して25年になります。この町の農産高級食材スッポンを農泊でスッポン鍋等で料理体験しながらスッポンの美味しさ、スッポンによる地元の特産の魅力を味わっていただきます。

加何でしょう。農泊でスッポンを。心よりお待ちしております。(作家 司馬遼太郎氏が絶賛した安心院盆地)



【料金】 観一名額 農泊とフルコーススッポン、朝食1名額 15,000円(2名以上)(全て税込み)
 10,000円(小学生以下)
 スッポン料理体験のみ お一人様 8,000円(3名以上)(スッポン鍋と鍋炊で6,000円)
 ※ 料理は基本フルコースでスッポン鍋、唐揚げ、肝御はしでお煮、雑炊、生血、漬物煮等とします。(都合によって、スッポン鍋と鍋炊で12,000円コースも用意できます)
 ※ 日額は基本持ち込みになっています。
 ※ 受け入れ人数は原則6名以内とします。(選択できます)
 ※ 家族は別として当日は一人様とします。(選択できます)
 ※ スッポン料理提供は10月～3月までとします。 ※ 要予約(7日～10日前出)

【農泊の注意】 ※ 農泊は安心院方面、宇佐市等全体でお受け致します。 ※ 近くの温泉まで送迎致します。
 ※ チェックイン午後3:00 チェックアウト 午前9:00 (アノアノ、温泉等は別途)

【申し込み】 NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会
 〒872-0821 大分県宇佐市安心院町下も 1195-1
 TEL 0978-44-1158
 FAX 0978-44-0353
 Email japan-ajimu-gt@nail.ocn.ne.jp
 申し込み時間(基本) 午前9:00～午後3:00とします。
 ※コロナ対策 (一人様(名額)、原則4人以内・予約の調整・換気・マスク着用)

スッポン料理の調理実習会チラシ



安心院町GT研究会事務局前の看板



宮田静一会長

(3) 農泊家庭「百年乃家ときえだ」

宮田会長のインタビューを終え、私たちは今日泊めていただく「百年乃家ときえだ」さんへと車を走らせました。ホストの時枝さん夫妻は安心院町GT研究会の活動の初期から農泊の受け入れを行ってこられたベテランで、特に奥さんの時枝仁子(まさこ)さんは農泊メンバーのリーダー的存在でもあります。

この日は、私たち取材班(2名)とは別に、女性グループ5名が宿泊されていました。通常は1日1組なのですが、取材の趣旨をご理解いただき、実際に宿泊者とも交流の機会があった方がいいだろうと、先方のご了解を得た上で受け入れていただきました。女性グループは母屋の古民家に、私たちはご家族用の住居に泊めていただきました。

1)「百年乃家ときえだ」は文化の香りが漂う古民家

百年乃家という屋号だけで期待はしていましたが、お伺いしてみると、やはり期待通りというか期待以上の佇まいでした。母屋の外観はリニューアルされているのでしょう、古い感じはしませんが、中に入ってみると、黒光りする柱や階段など重厚な日本家屋で、さらに家具や調度品もおしゃれで女性の観光客にも喜ばれそうです。なお、洗面、浴室、空調、電源やネット環境など、不便を感じることはまったくありませんでした。

母屋の1階にはリビング、床の間、時枝夫妻の寝所、ダイニングキッチン、浴室などがあり、2階には宿泊用の部屋が4~5室あります。女性グループは2~3室に分かれて宿泊されているようでした。

母屋の脇には小作りな建物が建っています。元は米蔵で、現在は改装されて囲炉裏が作られています。主に食事に使われていますが、必要に応じて1~2名の宿泊スペースとしても利用できるとのことでした。

2) 囲炉裏を囲んで、ジビエとガールズトーク

私たちが到着した時には女性グループは不在でした。近くの農場に農業体験に行っており、一度「ときえだ」に戻ってきた後、やはり近くの温泉施設で入浴してから戻って来て、夕食という流れとのこと。時枝さんご夫妻は夕食の準備と送迎を分担していました。なお、通常でも入浴は近隣の温泉施設を利用してもらうことが多いとのこと。狭い家庭風呂よりもゆったりできるし、受け入れ家庭側の負担も軽くなります。

女性グループが入浴から戻ってきました。このグループは関東在住の30代から40代の女性たちで、JTBの募集で集まったメンバーだとのこと。田舎に滞在する旅行企画には何度か参加した経験があり、今日は農林水産省の移住定住促進事業の一環で、都市の人たちに地方の暮ら

安心院農泊 行程のご提案			
安心院農泊のお申込み誠にありがとうございます。下記詳細につきましてまとめておりますのでご確認ください。また、何かご不明な点等ございましたらご連絡ください。よろしくお願ひ致します。			
概要			
お名前	森 真由緒		
日付	2021年12月5日		
宿泊プラン	農泊1泊2食(夕食・朝食)		
その他	12月6日すっぽん料理実習会		
日	時間	内容	備考
12/5 (日)	16:00	「百年の家ときえだ」チェックイン 以下 農泊家館にて	
		温泉ご入浴ご案内 夕食・宿舎・宿泊	夕食
		起床・朝食	朝食
12/6 (月)	8:00	以上 農泊家館にて きえだ」チェックアウト 時枝さんが先導して実習会場へ	「百年の家と
農泊詳細			
屋号	百年乃家ときえだ (代表者 時枝仁子)		
住所	大分県中津市安心院町且路 206 (Google map https://goo.gl/maps/cYwTjgK22)		
TEL	0978-44-0811		
家が家の特徴	お米と料理を数種しています。明治28年に建てられた自宅を各お客様に全量開放しています。ゆっぴりのんびりお過ごしください。お農さんの家庭料理をご堪能ください。		
客室	お部屋(母屋・別荘・別荘)		
設備 等	トイレ、お客専用、洗面台、お客専用、ペット、風呂(湯外)		
最寄り温泉	免田温泉(約4km)車で約2分 https://www.akita-ryokan.com/onsen/13/ 安心院温泉(約5km)車で約7分 https://www.akita-ryokan.com/onsen/3/		
			

安心院町GT研究会から事前に送られてきた行程表



百年乃家ときえだ 入口



百年乃家ときえだ 右が母屋、正面に見えるのが囲炉裏の部屋

しを体験してもらい、移住定住への意識や行動を促す、いわゆる実証実験的な試みのために参加したということです。「ときえだ」には女性たちが宿泊していますが、別の農泊家庭には男性たちも宿泊しているそうです。期間は1週間と長く、地域の人たちとの交流や農業体験などのプログラムが組み込まれているとのこと。

女性たちの旅の目的は単純な観光ではなく、「自分探し」のようなものをかなり含んでおり、経済的にも余裕のある層だと思われます。

米蔵を改装して設えられた囲炉裏での夕食は楽しいものでした。その日の夕食のメインは囲炉裏を使った焼き肉。他には、鰯の南蛮漬け、柿と大根のなます、おにぎりとすまし汁といった素朴なメニューです。

女性たちは食事に舌鼓を打ちながらグループ内で会話をします。ホストである時枝さんたちは自ら会話に入っていくたりはしません。聞かれたら答えるけれども、自分が会話をリードすることはありませんし、女性たちに職業や身の上などを聞くことはまったくありませんでした。宮田会長が語られた「農泊の極意」はきちんと守られているということがわかります。

時枝さんは女性たちから「いつ、なぜ、農泊をやろうとしたんですか？」と質問されて、当時のことを語りました。

「私は安心院で生まれ育って、他を知らなかったのよ。この家にお嫁に来て農業をやって、それ以外の仕事も知らなかったの。その頃、宮田会長がGT研究会を立ち上げて、農泊というものをやるので、参加したい人はいないかと。それでね、私はこれに人生を賭けてみようと思ったの」。とつとつとした語りなのですが、年齢を重ねた女性を選んだ人生の話は、女性たちの心にしみただと思えます。

女性たちに安心院の農泊の感想を聞いてみると、「この農泊はレベルが高いですね。組織がしっかりしているので、対応もきちんとされている」とのことでした。

夕食と食後の会話が終わり、女性たちは母屋の2階の部屋に引き上げていきました。それから私たちは時枝のお父さんと家の前で立ち話をしました。見上げると満天の星。



囲炉裏で食事する女性グループ
奥に座っているのがホストの時枝さんご夫婦



女性たちと語り合う時枝仁子さん

「今日はよく見える。お嬢さんたちにも教えてあげよう」とお父さんは知らせに。すぐに女性たちが上着を羽織って、寒い外に出てきました。夜空を見上げて歓声を上げ、母屋の灯りが遮られるあたりまで進み、またしばらく震えながら歓談です。「こんなに星が出ているのは見たことがない」と口々に話していました。

3)「百年乃家ときえだ」のシンプルでおいしい朝

翌朝はいい天気になりました。朝霧が出るかと期待していたのですが、出ませんでした。

ついからですから、朝食についても記しておきます。

海苔と生姜の佃煮がのったおにぎり、オムレツ風の卵焼き、ひじきの煮物などの少量の惣菜が配されたワンプレートに、お味噌汁とヨーグルト。シンプルな朝食でちょうどいい。新米のおにぎりがとても美味しかったです。



百年乃家ときえだの朝

(4) スッポン料理実習会

翌日は、宇佐市院内支所に併設された宇佐市民図書館院内分館で開催される「スッポン料理実習会」取材しました。久しぶりの「グリーンツーリズム実践大学」であり、新たな客層や高額商品帯を開拓するための大切な試みでもあります。

参加者は女性9名と宮田会長を含む男性4名。事前にメディア各社にリリースされており、料理実習が始まると、新聞社や地元ケーブルテレビ局の記者、宇佐市役所の方が次々に参加されます。スッポン料理の勉強会にとどまらず、コース料理の試食会を兼ねて、メディア各社の記者さんに賞味していただいた上で情報発信に手を貸してもらおうということです。長年のメディアとの交流経験を持っている宮田会長、抜かりがありません。

メディアとの付き合い方とともに、興味深かったのはお母さんたちのチームワークの良さです。スッポンの鍋、唐揚げ、肝と玉子の煮物など、多彩な料理を作っていく同時並行の作業が、すごいスピードで進んでいきます。長年連携してきたチームだからできる役割分担のスキルや呼吸があるのだろうと感心した次第です。

言うまでもなく、スッポン料理は絶品の美味しさでした。今後このような商品開発がいかに進展し、効果を上げていくのか、楽しみにしたいと思います。

スッポン料理実習会



(5) 再び、「百年乃家ときえだ」へ

スッポン料理実習会の後、再び「百年乃家ときえだ」に戻り、時枝さんへインタビューを行いました。

「この2年間、ウズウズしていたんだけど、会長のGOサインが出ないと私たちは動けない。料理実習会は待ってました！という感じなんだけど、急な話で月曜の平日だったから、人数はあれくらいしか集まらなかったの。本当はあの2～3倍は集まるんだけどね」。

ー チームワークやスピード感がすごかったですね。

「女性の生活力だと思いますよ。人は何をやっている、じゃあ自分は何をする。指示されなくても動ける。女性が持つ暮らしの中の生活力。で、会長のホイッスルがピーっと。運動会じゃないですけどね、楽しいのよ。みんなで神輿を担いでわっしょいわっしょい。今日はスッポンのお神輿だったけどね」。

ー それが安心院の特徴ですね。

「安心院は、リーダーとともにまとまって、協力し合ってひとつのことをやり遂げようと。何も無いところをなんとか形にして、町に新しい産業、女性たちの新しい産業を興そうとしてね。ブレないリーダーが必要だし、行政の力もお借りしないと前に進まない。自分ひとりではこなせないの、周囲の人と手をつないで、まずは主人と家族とね。そういったところから力を集めていかないとね」。

時枝さんの話は宮田会長が語られた「極意」にシンクロし、より具体的に表現されていきます。

「組織ができて『あの人は好かん』とか悪口は絶対言わない。良いところをほめてあげて、悪いところは見ないで口にもしない。自分のものさしだけで見ない。他人のものさしは自分とは違うことを知って、自分が勉強して、自分を成長させればいいんだから」。

「一流に学ぶ、というのも安心院の合言葉ね。『グリーンツーリズム実践大学』というのをコロナ前までは年に5、6回やって。2日間の日程で、1日目は学識経験者の講義、次の日は調理の講習。受講料は2日間で2,000円～3,000円。自分で受講料を払って、自分の肥やしにするの。農泊に来られるお客さまに提供できる自分のカードを増やしていく。どのカードを引っ張ってもちゃんと対応で



時枝仁子さん

スッポン料理実習会の様子



きるように。講義は自然や生態の話とか難しい経済の話とかもあって、ふつうなら聞く機会がない。耳で学習するのね。それがどこで役立つかはわからないけど、学習意欲は持った方がいいかな。好奇心ね。いろいろな人と接することで刺激になる。好奇心を持って暮らすということは大事かな」。

一 泊まりに来られる関東の女性たちは安心院のどこに惹かれるんでしょうね？

「素になれるというか、自分自身と向き合えるんじゃない？30代くらいの女性たちは迷いもある。私もそう。結婚して子どもを育てながら、自分は何のためにここにいるのだろうと。でもなかなか見つからない。だけど、迷っていることが大事よね。迷わないと何も出てこない。研究会でも『宿泊者の親のことは聞くな』ときちんと指導されていますから、お嬢さんたちにもプライベートなことは聞きません。でも1週間休みを取ってここまで来るのは面白半分じゃない。やはり自分をちょっと探しているんだろうなと思います」。

このようなことは大人も教育旅行で受け入れる子どもたちも同様だと時枝さんは話します。

「ギャルの子たちも来てたけど、かわいいよ。ガングロの子が帰るときには泣いてね、顔をどろどろにして。街に帰ればまた元の鎧を着るんだろうけど、『ああ、良かったね。また元気を充電できて街に帰れるね』と、そう思うんですよ。私みたいなペーペーがそんなこと言っちゃなんですけど、人は厳しく育つのも大切だけど、たまには優しく暮らすのも大事かな」。

時枝さんはゆっくりと言葉を選びながら話しますが、言葉一つ一つに深みがあり、都会の女性たちがお母さんと慕うのもよくわかります。そして、これらの会話の根底に流れる思想が宮田会長と見事につながっており、安心院町GT研究会という組織の強さも感じた次第です。

「私たちは鎧を着るにも着る物がない。これしかない。それ以上の自分にはなれない。旅館の女将にも京都の女将さんにもなれんの。田舎の母ちゃん、ばあちゃんにしかなれんのだから。まあ、しょうがないわ。腹くくらな」。



百年乃家ときえだ

3. 合同会社渡海屋 と かい や (福岡県宗像市大島) む な か た し お お し ま

地域外の若者たちが、神守る島の活性化をめざし起業。
ゲストハウスの開発を手始めに、多彩な企画開発へ。



[宗像市大島のプロフィール]

▶福岡県宗像市は、福岡市と北九州市の間に位置する人口10万人弱の市で、福岡都市圏のベッドタウンとして発展を続けています。「宗像大社」や「鎮国寺」などがあり、特に宗像大社は沖ノ島を神域とし、沖ノ島で出土した古代祭祀の奉獻品の多くは国宝に指定され、「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」は平成29年(2017年)に世界文化遺産に登録されています。

▶大島は宗像市の神湊(こうのみなと)渡船ターミナルから船で約25分。大島からさらに50kmほど先にある沖ノ島は神域として一般の上陸は禁止。最も近くで沖ノ島の宗像大社を遥拝できるのは大島で、沖ノ島の「神宿る島」に対し「神守る島」と呼ばれています。

▶大島にはこれら歴史的な物語や神社、美しい景観やマリンレジャーなどの観光資源もあり、海釣り目当ての来訪者も多く、また近年では九州オルレのコースにもなっています。一方、島の過疎化は進行しています。昭和30年代のピーク時には12,000人の人口がありましたが、平成22年(2010年)には731人、令和3年(2021年)12月では569人と減少が続いています。



(1) 神湊から船で大島へ

今回、合同会社渡海屋を対象地として選定したのは、使われなくなっていた別荘をリノベーションしてゲストハウスに再生し、島の活性化につなげようとしている若者たち(合同会社渡海屋)が実験的にワーケーションの場として企業の方々を受け入れ、大島の課題である漂着ゴミの清掃等をプログラムとして提供したという記事を目にしたことがきっかけです。

地域資源(歴史や海)と空き家の再生、地域への波及効果といった連動性は農泊に限らず地域活性化策につながるものです。また、圧倒的に美しい景観を目の当たりにする高級ゲストハウス(1棟貸しで1泊8~10万円)という話題性のある商品を核として周辺のサービス(低価格のゲストハウスや新たな観光商品など)を配置していこうという考え方は、地域間競争の中での情報発信や収益性の拡大という面で熊本の農泊地域にとっても有効ではないかと思われます。

令和3年(2021年)11月28日(日)、午前6時すぎに熊本市を出発し、高速を使って2時間ほどで神湊のターミナルへ到着しました。すでに第1・2駐車場は満車状態でしたから、休日の観光客はけっこう多いのだらうなと思いました。天気もいいので釣り客が多いのかもしれませんが。しかし、乗船してみると、釣り竿や保冷ボックスを持った見るからに釣り客という人はほとんど見当たらず、意外でした。

ゲストハウスを運営する合同会社渡海屋のメンバーのひとり、谷口竜平さんとはこのフェリーの中で落ち合いました。

実は、私が合同会社渡海屋に強い関心を持ったのは、こちらからの取材依頼に対する谷口さんの対応の良さがあったからです。私からのメールに対してすぐに返事があり、取材協力への快諾、対応内容と予算の提案、アテンドや食事、レンタカーなどの手配と、数少ないメールで効率的に打ち合わせが進み、とても気持ちがよかったです。そして、「大島には何時のフェリーで渡られますか?」と問い合わせが来て、同じ便で集合となったわけです。

この間のスムーズな対応は都会のサービス業に慣れた方たちにはストレスなく感じられるはずで、今後の農泊にも必要な要素になると思いました。



宗像市神湊フェリーターミナルから大島へ



渡海屋・谷口さんの案内で中津宮へ



中津宮から湊を見下ろす

(2) 晴天の下、大島を巡る

午前9時25分発のフェリー「おおしま」は約25分で予定通り、大島湊ターミナルに到着。電動自転車のレンタル窓口もあり、グループの観光客たちが列に並んでいます。

宗像大社の三宮[沖ノ島の沖津宮(おきつぐう)、大島の中津宮(なかつぐう)、本土の辺津宮(へつぐう)]のひとつ中津宮はターミナルのすぐ近くです。谷口さんの案内で見学しました。

中津宮の下で、渡海屋の代表である田中誠一さんと合流。宗像大社の三社奉賛会会長の沖西敏明さんも一緒です。お二人は、たまたま遭遇し、取材が来ているので一緒に話しましょうと田中さんが誘ってくれたそうです。

沖西さんは地元の方で宗像大社の重要な役目を務めておられ、島の歴史など興味深い話を聞かせていただきました。また、渡海屋代表の田中さんがいかに地元のキーマンと親しい関係を築いているのかも伺えました。

その後、宗像大社沖津宮遙礼拝所へ。ターミナルや中津宮とは反対側、北側の海岸にあります。断崖の上にある沖津宮遙礼拝所からは玄界灘が一望。年に何度もない好天に恵まれ、約50km離れた神宿る島・沖ノ島をはっきりと見ることができました。

ぽつりぽつりと観光客に出会います。九州オルレのコースを歩きに来た人も多いようです。徒歩の人もいれば、電動自転車で走る人も見かけます。島ですから、大型バスが来るということはありませんが、域外の人を見かけるのは日常のようです。

昼食後、すぐ近くの「かんす海水浴場」へ。ここには「夢の小夜島」という鳥居のある小島があります。この場所を使って、「禊(みそぎ)サウナ」という企画を渡海屋が考えており、そのデモンストレーションを風景を取材しました。なお、翌日には福岡市役所からの推薦によりイギリスBBCテレビが取材に来るということです。

禊サウナは、移動式の簡易なテントサウナの利用サービスですが、元旦などに海に浸かって夢の小夜島の鳥居をくぐるという大島伝統の「禊」と組み合わせるとのことです。これらについては後ほどインタビューの中でご説明します。



宗像大社沖津宮遙礼拝所



右から谷口さん、沖西さん、田中さん



かんす海水浴場と夢の小夜島

(3) 合同会社渡海屋、田中さん・谷口さんインタビュー

襖サウナの取材を終え、今日の宿泊地である「TOKAIYAゲストハウス」へチェックインしました。ここは空き家になっていた民家をリフォームして、リーズナブルなゲストハウスとして渡海屋が運用しています。

外の壁や玄関脇にはロゴマークがプリントされたプレートが設置されています。このロゴマーク「TOKAIYA」は、一日一組限定の高級ゲストハウス「MINAWA」や三番目のゲストハウス「エンデメンデ」とともにデザイナーである谷口さんの作品です。

ここで、田中さんと谷口さんにインタビューさせていただきました。

1) 合同会社渡海屋は「島で仕事を作っていく会社」です

田中さんや谷口さんの名刺には「宗像大島の島づくり会社 合同会社渡海屋」と表記されています。渡海屋は、ゲストハウスの開発・運営をやっているだけではなく、アテンドサービスやレンタカーサービスなど観光関連のメニューも備え、また、襖サウナといった新しい観光企画の開発も行っている会社です。

ゲストハウスの運営を中心に観光サービス事業を展開しますが、その先には「疲弊していく島を活性化させたい」という思いがあります。「『島で仕事を作る』ことが僕たちの一番の目標かもしれませんね」と田中さんは語ります。「農泊」とは異なりますが、「地域づくり」の視点は共通しており、新しい時代に合わせたチャレンジする姿勢と手法には学ぶところが多いと思います。

渡海屋の構成メンバーは4名です。代表の田中さんは大阪出身で宗像市(本土)と大島の2ヶ所で整骨院を経営しており、大島に住んで9年目。谷口さんは宗像市(本土)に実家があり、同市でデザイン事務所を運営しています。3人目は糺屋(こうじや)総一郎さんで投資コンサルタント。4人目の山下直人さんはリクルートの社員で以前は旅行情報誌「じゃらん」に所属していました。興味深いのは地元・大島の出身者が一人もいないこと。そして、領域が異なる専門家が集まっており、各自の専門知識や経験が渡海屋の発足や運営に役立っているということです。このような特徴もまた熊本の農泊や地域づくりに大きな示唆を与えてくれるのではないかと思います。



TOKAIYAゲストハウス



渡海屋代表の田中さん(左)と谷口さん(右)

2) 地域外の4人が合同会社渡海屋をつくったわけ

合同会社渡海屋が設立されたのは令和2年(2020年)2月、新型コロナウイルス感染症が爆発的に広がる直前でした。「立ち上げて『よし、頑張るぞ』という1、2カ月後にコロナがやってきたという感じでした」(谷口さん)。

まず田中さんから渡海屋を設立するに至る経緯をお聞きしました。

「本土の方で治療院をやっていたのですが、大島の整骨院が空くので1年間だけやってみないかと声をかけていただきました。島の人たちと触れ合っているうちに、人口も少ないですから、区長も務めることになったりして、過疎の問題など島の実情を知ることになったわけです。

そんな時に毎年開催している花火大会も継続が難しいという話を聞いて、『募金などでみんなで頑張れば継続できるのでは?』と提案したら『じゃあ、お前やれよ。実行委員長になれ』ということに。そこで手伝ってくれたのが宗像でデザイナーをやっていた谷口くん。知人の紹介でした。谷口くんといろんな話をしていく中で『大島の活性化を手伝いたい』というテーマが明確になってきました」。

谷口さんが話を引き継ぎます。

「『大島を盛り上げよう』という話になりました。それで『使える物件を探そう』となり、北西岸の大島灯台の近くにある空き別荘を見に行きました。『ここで宿ができれば面白いよね』と、私の知人に投資コンサルタントがいるので相談したら興味を持ってくれて。それが3人目のメンバーの靴屋さんです。『リニューアルできるかな』『やりましょう』『地域のママさんたちにベッドメイキングなどを頼めば地域にお金が入る仕組みにもつながる』というふうに進行していったわけです」。

「ママさんというのは主に地域外から嫁いで来ている奥さんたち。整骨院の受付などで手伝ってもらっている方たちもいて、そのつながりです」と田中さん。

「大島では奥さんたちが気軽にできるパートとかないんです。整骨院での手伝いでも『仕事を作ってくれた』と感謝してもらえる。そのことが、『大島に仕事を作る』という目的を考えるきっかけになりました」。

平成30年(2018年)の秋、空き別荘は「一日一組限定離島宿MINAWA」としてオープン。そして令和元年(2019年)、3人のメンバーが集ったところで、会社を設立することに決めました。

「会社組織にしたのは『僕らは大島でこういうことをやります』という覚悟を示すことでもありました。3人がバラバラに行動していても、島の人からは『お前ら何をやってるんだ』となる。ちゃんと認めてもらう必要がある。また、行政や企業とおつきあひするにも法人格がないと動きづらい。その後、宗像市から創業補助金をいただいたり、福岡県の事業を一部受託したり、法人格を得たメリットは大きいです」(谷口さん)。

会社設立まもなく、4人目のメンバー山下さんが加わります。山下さんはリクルートの社員で当時は旅行情報誌「じゃらん」に所属しており、広報関係に詳しい人材でした。運営するゲストハウスの情報発信、さらに大島の観光活性化におけるPRについて必要な知識を持ったメンバーでした。



存続が危ぶまれた花火大会のにぎわい



渡海屋の4人のメンバー
(左から)靴屋さん、谷口さん、田中さん、山下さん

3) 3つのゲストハウス、その役割のちがひ

渡海屋の事業の中心は、ゲストハウスの運営です。ここではどのように企画し、運営しているのか見ていきます。現在、オープンしているゲストハウスは3軒です。

1軒目は、「一日一組限定離島宿MINAWA」。大島の北西岸にある大島灯台のすぐ近くにあり、元は企業の保養施設だったようです。灯台や沖ノ島を望む高台にあり、景観は抜群。白を基調にした清潔感のある建物で、大人なら6名まで宿泊できます。素泊まりの料金は1棟貸し約10万円で、料理のケータリングやマッサージなどの付帯サービスも提供しています。福岡市や東京の女性グループや企業のワーケーションとしての利用が多いそうです。

谷口さん「ハイクラスの雰囲気仕立てたのは、糺屋さんとの打ち合わせからです。彼は鎌倉や京都で古い物件をリノベーションして宿を開発しており、単価の高い仕事を生み出し、地元にお金がちゃんと落ちる、関わる人に恩恵がある仕組みを作らないと、特に大島のような場所では継続していけないのではないかと。そこでまずは『高い宿をつくる』というところからスタートしたわけです。

また、大島には以前から釣り客向けの安い宿もあります。それらとは競合せず、相乗効果を生み出していくべきだとも思いました。実際、お客さんの取り合いにもならず、スタートとしてはよかったと思います。『単価』というのは大事なポイントの一つだと思います」。

2軒目は、「TOKAIYAゲストハウス」。こちらは「MINAWA」の高級感とは異なる、漁村の民家をリニューアルしたリーズナブルなゲストハウスです。「MINAWA」オープンのすぐ後にオープンされました。

「TOKAIYAゲストハウス」は木造2階建て。1階部分は玄関、居間が3部屋にキッチンなどの共有スペース。裏には簡単なバーベキューができるくらいの庭があり、縁側や洗濯機などがあります。2階には宿泊できる部屋が4つあり、2室は1名用のベッドルーム、2室は数名が泊まれる和室になっています。

建物は築60年ですがバスルームは新しくきれいで、Wi-Fi環境も整っています。また、以前使われていた方が高齢者だったようで、屋内各所に手すりが設置されてお



MINAWA



MINAWAのベッドルーム(上)と浴室(下)



MINAWAのベランダから見下ろす風景

り、段差や急な階段がある古い日本家屋においては誰にとっても安全な工夫になっています。宿泊料金は1名3,000円代から設定されており、リーズナブルです。そのため海外からのお客さんも多いということです。

谷口さん「MINAWAは福岡の方の利用が多いですが、TOKAIYAの方は海外のお客さんが来ますね。ヨーロッパの方は安いゲストハウスに転々としていく文化があるので。MINAWAは国内の方がちょっと豪遊する感じです」。

3軒目のゲストハウスは、「エンデメンデ」。大島の方言で『どうにかこうにか』という意味。ここは「MINAWA」と同じ1棟貸しのゲストハウスで、料金は1棟1泊(8名まで宿泊可)で3万円からの設定になっています。

本来、「TOKAIYA」は渡海屋メンバーの基地のように使う予定だったそうですが、お客さんが増えて、新たなゲストハウスが必要になり、「エンデメンデ」をオープンしたとのこと。宿泊業免許も取得し、令和3年(2021年)11月にはネット予約も受け付けられるようになっています。

3軒のゲストハウスの条件などを見比べると、それぞれにターゲットが異なり、料金設定などに多様性を持たせてあることがわかります。逆に言えば、その建物が立地している条件を元に、成立可能なターゲットや料金を設定し、そのニーズに沿うようなリフォームが行われているということでしょう。

それも1軒ずつオープンして、その動向やニーズの有り様を見ながら次のプランを考えていくというのはとても良いやり方のように思えます。

大島のような離島では一時に訪問される観光客の人数も限られているでしょう。であれば、同じターゲット同じ価格帯のゲストハウスを増やしてもお客さんを取り合うだけになってしまいます。領域をずらしていくことで多様なニーズに応えられる大島観光を作っていこうという戦略がよくわかります。

4) ターゲットと情報発信、そして新型コロナの影響

渡海屋の3つのゲストハウス運営のやり方で、興味深いと思った点のひとつに「情報発信」の方法があります。このことはターゲット(客層)と密接な関係があります。

ハイクラスな1棟貸しゲストハウス「MINAWA」はネットで調べると「じゃらんネット」や「楽天トラベル」、「るるぶトラベル」などからも予約することができます。同じく1棟貸しですが価格はリーズナブルな「エ



TOKAIYA 入口



TOKAIYA 1階
玄関前の居間(上)、リビング(中)、台所(下)

ンデメンデ」の場合は、「じゃらんネット」と「JTB」。

一方、古民家ゲストハウスでよりリーズナブルな「TOKAIYA」では一般的な予約サイトは使用せず、海外向けの民泊情報サイト「Airbnb(エアビーアンドビー:以下、『エアビー』)」だけで情報発信を行っています。

田中さん「TOKAIYAは市の広報にも載せず、エアビーだけに載せました。エアビーだけでどんな人が来るのか知りたくて、実験してみたんですね。大島の人で使いたいという人が出てきた時、参考になれるかと思ったから。するとハーバード大学のアメリカ人の女性研究者が一人でやって来て、1カ月滞在していきました。研究室がコロナで閉鎖されるのでエアビーで脱出先を探したと。もともと日本が好きで片言の日本語がしゃべれる人でした。また、イギリス人の夫婦が本国からエアビーで予約してくれました。エアビーは翻訳もしてくれて便利です」。

谷口さん「エアビーの海外への効果はありますね。TOKAIYAがいっぱいになって、エンデメンデにお客さんを回したこともありましたから。僕の実家(宗像市)ではシェアハウスもやっていて民泊もやれるようにしたんですが、やはりエアビーで海外からの問い合わせが多かったですね。『日本の田舎を体験したい』『九州に遊びに来た途中で一泊したい』という内容でしたね」。



TOKAIYA 1階 浴室



TOKAIYA 2階 居室

しかし、このような反応やターゲット像の想定をそのまま信じていいのかわからないと谷口さんは言います。

「渡海屋の事業そのものがほぼ新型コロナが拡大してからの稼働ですから、実際には平常時の状況がどうなるのかまだ体験していないんですよ。国内からのお客さん、海外からのお客さんがコロナ明けにどのような動きになるのか。まだわかりません」。

5)「すきにもうが」な渡海屋、今後の計画は？

地域外の若者たちが会社を作って新しいことをやっている。それは島の人たちからはどう見えているのでしょうか。

田中さん「あるおばあちゃんが、僕のことを『すきにもうが』と言ってるので、どういう意味ですかと聞いたんですよ」。

谷口さん「『鋤』で『藻』はすくえないですよ。そういう馬鹿なことする人、人がやらないようなことを喜んでやるような変な人。損得抜きで好きなことをやる人みたいな。そういうのを『すきにもうが』と呼ぶそうです。褒め言葉じゃないですね」。

田中さん「アホなことやっとなと。でもそのスタンスは大事やなあと思っています」。

では、渡海屋はなぜ「すきにもうが」なことをするのでしょうか。

田中さん「やっぱり『島の人に惚れた』というのがあるんですよ。来訪された人たちに島の人とふれあってもらえば、僕が感じている面白さをわかってもらえるんじゃないか。そういう場を作りたいなと思うんです」。

今後の計画についても聞かせていただきました。

まず先ほど見せてもらった「禊(みそぎ)サウナ」のアイデアの実現化について、伺ってみました。

谷口さん「渡海屋メンバーの山下くんがアウトドア好きで『離島サウナをやってみたい』と。ではテントサウナを島の絶景ポイントでやってみたら？サウナの後に冷水に入るのをかつてあった『沖ノ島の禊』を疑似体験することに変換してみたら？そんなふうに展開していったんです。テントサウナのブームに大島の歴史資源を組み合わせるという企画ですね」。

田中さん「実際に大島の海岸にテントサウナをいくつも並べて体験してもらおうイベントも実施しました。とても好評で、本土の方から若い人たちがやって来て、水着姿になるわけです。島の人たちがびっくりして、『田中、でかした！』と(笑)」。

次に、「健康」をテーマにしたファスティングなどの企画も検討中とのことですよ。

谷口さん「ダイエットやファスティングは食欲との戦いですが、離島には逃げ場もなければ、コンビニも娯楽もない。その代わりに、自然を楽しんでくださいと。すると、散策とか神事とか大島の資源をそのまま活かせる。あるものを活かすコンテンツとしてダイエットやファスティングは大島に合っていると思っています」。

また、リピーターづくりにも機能すると考えておられます。

谷口さん「ダイエット、ファスティング合宿は短い人でも2泊3日、長ければ1週間と滞在期間が伸びるし、その期間中に地元の人とのふれあいも増えるので、『また行ってみよう』というニーズも生まれやすい」。



夢の小夜島と禊サウナ

レンタサイクルで島を巡る観光客



谷口さん「でも、リピーターが生まれるいちばんの要因は田中さん。お客さんが来た時、最善を尽くす。『田中さんがいたから、大島は楽しかった』とおっしゃる方が多いんです。田中さんがいなくてもいかに『楽しい大島』にしていけるのかが、これからのポイントですね」。

田中さん「僕が大島ファンなんです。島の人たちのファンなんです。島に来られた方たちにもいろんな人たちに会って、ファンになってほしい。そういう気持ちでやっているんですよ」。

ほかに「島の生活を体験する」といった農泊における農業体験のような企画はないのでしょうか。

田中さん「そういう体験メニューも考えたいですね。今も『神社まわりの清掃』には多くの人に参加しています。大島にとって神社や遙拝所は重要な施設で、清掃活動も島の暮らしを知るひとつの体験ですね」。

6) ワークেশョンの可能性と大島観光の目的

今回、大島を選定したひとつの理由は、「ワークেশョン」の場として農林水産省のホームページなどで紹介されていたからですが、実際に企業の研修の場としての活用実績はほとんどないということです。

島には光通信が開通しており、特に港やTOKAIYAがある南側はWi-Fi環境も整っている場所が多いようです。TOKAIYAサイトのコメント欄には、「Wi-Fi環境もよく、円滑に仕事できました」という書き込みもありますし、海外からの来訪者による好評のコメントも複数見られます。理由として挙げられたのは「ホストの対応がよい」「Wi-Fi環境が整っている」「建物は古いがバスルームは新しく、不便や不快な箇所がない」などです。

では、これだけの環境が整っているのに「ワークেশョン」の活用が増加しないのはなぜか。まず第一に新型コロナウイルスのせいで地域間移動がはばかれる状況にあること。第二に企業内でそのように一定期間会社を離れ、かつ、社内の同意を得るのは現状ではかなりハードルが高いということです。たまには会社を離れ、週末、離島でプランニングをしようという話になっても、家庭の行事や個人の嗜好性もあって、まとめるのは難しそうです。

そのように考えた時、前述の「ダイエットやファスティングを目的とした大島観光」といった切り口は重要な意味を持つかもしれませんが、「仕事」という切り口では観光プランとしてまとまりにくい、「独自の目的」なら志願者としてまとまるかもしれません。このように地域外の人々の多彩な視点やアイデアと大島の資源とが結びつき、試行錯誤しながら発展していくところが、合同会社渡海屋の取り組みの面白さではないかと思います。

MINAWA 1階
明るく広いリビングは仕事用にも使いやすそう



(4) TOKAIYA ゲストハウスに宿泊

インタビューを終え、田中さんと一緒に近くの「姫っこカフェ」で夕食をいただきました。女性グループでも気軽に美味しい食事ができるカフェで、大島の特産品なども販売されていました。

翌朝8時、近所のお母さんが朝食の準備をしに来てくれました。お母さんも田中さんの施術を受けているようで、「しばらく前は歩くこともできんようになってね。田中先生のおかげでこうやって歩けるようになったと。だけん、田中先生から頼まれると断れん」と笑いながら話してくれました。

古い建物は落ち着きますし、バス・トイレがきれいで快適なものポイントは高いです。標準的なアメニティは揃っていますし、大型テレビやアイロンなどの備品も用意されていました。リビングのテーブルには宿泊の手引や大島のガイドブックなどが置かれています。事前に情報は得ていましたが、快適な宿泊で、とても心地よい朝を迎えることができました。



夜明けの大島湊



朝食の準備のお手伝いしてくれたお母さん

(5) 帰還までの取材

2日目は、渡海屋でレンタカーを用意してもらい、島内をまわりました。

まずは「MINAWA」です。大島灯台と沖ノ島が浮かぶ玄界灘を見下ろす美しい風景です。天候は晴天、水平線もくっきりと見え、沖ノ島も見ることができました。ベッドルームからもバスルームからもオーシャンビュー。これは満足度が高い。多少高めのプライスでも満足される方は多いでしょう。なお、「MINAWA」の運営管理は渡海屋メンバーの一人である糀谷さんの会社・株式会社ローカルツーリズムが行い、地域の女性たちによるベッドメイキングなどの業務もそこからの委託になっています。

次に「MINAWA」から東に進んですぐの風車展望所・砲台跡へ。昭和11年(1936年)に完成した砲台の跡で、4門の大砲と観測所のコンクリート基礎部分が残されています。まわりを海に囲まれたような風景を味わえます。

観光に訪れていた女性たちに出会いました。宗像市(本土)に在住しており、子どもの頃から何度も訪れているそうです。宗像市の人たちにとって大島は気軽に自然や景観を楽しむことができる、例えば熊本市の人たちが菊池

風車と砲台跡(上)と観測所からの眺め(下)



溪谷や阿蘇のような場所に行くことと同じなのかもしれません。

大島灯台あたりや砲台跡あたりの道路では、小グループの来訪者とすれ違ったり、道を聞かれたりしました。多くは九州オルレのコースを巡っておられるようでした。

その後、私たちは再び「TOKAIYA」に戻って帰る準備をしつつ、田中さん・谷口さんと合流して昼食を食べ、「TOKAIYA」の清掃に来た島の奥さんの話を聞いてからフェリーターミナルへ。

島に住む方たちの話では、渡海屋の活動についてはとても好意的です。特に域外から嫁いできた若いご夫人たちにとっては島での新しいアクションは楽しい出来事だし、協力意向も高いようです。一方、課題については「医療機関の不足」が挙げられました。過疎化する離島にしては子どもの姿はよく見かけます。しかし、すべての出産は本土で行われるそうです。大島には出産が可能な産婦人科医院が1軒もないのです。

フェリーターミナルには島から帰っていく人、仕事で本土と行き来する人があふれています。月曜日ですから、観光客も若年層は見かけず、オルレなどのシニア層が多いようでした。帰っていく観光客と一緒に、私たちは午後のフェリーで、大島を後にしました。



フェリーで大島から本土へ



4. 株式会社 JTB 福岡支店 教育旅行センター (福岡県福岡市)

教育旅行の現状とニーズの変化。

ツーリストの視点でみる「農泊」の可能性と課題。

本調査では、教育旅行の商品造成に取り組まれているツーリスト側の視点から、ニーズの変化や地域側の課題などについて意見を聞くために、株式会社 JTB 福岡支店にもお伺いしました。

対応していただいたのは、JTB 福岡支店の営業推進課長・谷政司さんと教育旅行センターの玉木雄三さんです。谷さんは主に旅行全般の動向について、玉木さんは修学旅行を中心にした教育旅行の商品づくりを担当されており、そちらからの視点でお話いただいています。

(1) 教育旅行はどう変化し、その中で「農泊」はどう位置づけられていますか？

玉木さん「中学校の修学旅行だと京都でお寺や神社を見て帰ってくるのが基本です。一方、農泊の利用は5%に満たないのが現状です。高校では3割が台湾、シンガポールなど海外です。残り3割がスキー、残り3割が東京というのがこれまでの状況でした。

しかしコロナ禍になって中高ともに遠方に行けなくなり、『身近な場所を見つめ直す』『九州内を旅行する』というニーズが高くなっています。そういう中で農泊も見直されていく一つのコンテンツではないかと思っています。

谷さん「その際、学校の人数が収容できる可能な限り同一の条件の受け皿であること。それが大前提となります。例えば100人の学校で、30人はホテル、30人は民宿、30人は農泊となると、どっちがいい悪いではなく、近しい体験ができにくくなる。すると民宿や農泊を選択肢として選びにくいわけです」。

玉木さん「一方、沖縄で、アクティブな子は農泊しながらマリンスポーツ体験。別の子はホテルでゆっくりして観光を楽しむ…みたいな、コースで分けている学校もあります。

但し、今はコロナ禍で農泊の活用は困難です。農泊・民泊だと1家庭に4、5人入ってもらいますが、それも障壁かもしれません。学校としては極力人数で対応してほしいというのがあります。農泊は人との触れ合いが大事ですが、そこが『逆に足かせになる』というところがありますよね。

課題に対して『対応策を立ててます』と言っても、農泊は各家庭に分かれるので、どこまで保護者にご理解いただけるのか、何か問題があった時に誰が責任を持つのかなどは結構出てきます、ネガティブなことを言うと。一方で、学びとかは絶対にホテルに泊まるよりもいいと思うので、そのクリアをどうするかというのが課題でしょうか」。

(2) 教育旅行において、現在、どのように商品開発が行われているのですか？

谷さん「教育旅行においては、現場での活動だけではなく、事前に何ができるのか、帰った後にどういう振り返りができるのかが重要になっています。今、『旅前、旅中、旅後』というワードを使っていますが、そこまで連動した商品造成が教育旅行には必要になると考え、取り組んでいるところです」。

玉木さん「事前にインプットするのが『旅前(たびまえ)』、現地でのフィールドワークが『旅中(たびなか)』、帰ってきてアウトプットするのが『旅後(たびあと)』ということです」。

高校では『総合的な探求の時間』が週に1～2コマ組み込まれています。

その時間を使って、旅行先を想定し、『こういう課題がありそうだ』という仮説を立て、いかに解決できるのか考えてみる。これが『旅前』。その仮説や事前学習を現地で確かめるのが修学旅行・研修旅行で『旅中』。そして、帰ってきて、仮説とどう違うのか、どのような取り組みをしていけばいいのかなどを考え発表するのが仕上げの『旅後』です。

これは教育機関の修学旅行だけではなく、企業における研修旅行においても同様です」。

(3) ツーリストからみた宿泊受け入れ先の条件とはどのようなものですか？

谷さん「管理部分で申し上げますと、社内（JTB 内）でも消防法の適応とか防災のチェック点検とかスプリンクラーがきちんと備えてあるのか、万が一の時に補償ができるような施設かどうかが前提ではあります。私たちは契約した学校や企業さんを取り引きをする施設さんにご案内するということになるので」

玉木さん「修学旅行でいうと、例えばアレルギーとか、どれだけ対応できるのかが非常に重要です。農泊の場合、どこかまとめている組織があってそこがどれだけ対応力があるのか、そこを旅行会社は見ていると思います」

(4) 「農泊」や「地域の旅行誘致」の可能性と課題とは？

玉木さん「その地方が何か社会課題を持っていて、『ここがうちの課題です』と伝えられたら、修学旅行の場合は『それについて考えていきましょう』となるので、商品化が可能性かなと思います。

過疎化の問題や、熊本にもたくさんある河川氾濫とか水害のこととか身近にあり得ることです。震災もそうですね。

『どう考えさせるか』という仕掛けですよ。ネガティブなことを PR するのがいいかどうかはさておき、生徒さんたちが考えて発表するようなプログラムで、地域の方たちや現地の学校と語り合えるといいし、そこに農泊が入るとより深いものが生まれるのかなと思います。

どうしたらこの土地が魅力的になるのか。最終的には福岡の子たちは地元について考えるのですが、その前に熊本県〇〇市でこんな取り組みをしているのでそこを参考にして、あとは地域に帰ってきて自分たちの土地にどういう活かせるのか、というところに集約させていくような。

小中学校では難しいかもしれませんが、高校・大学では今後かなり魅力的なコンテンツになると思います。高校での学びが大学に繋がる……大学で学ぶために今こんな勉強をしているんだと。高校から大学に行くときに、こういう能力を身に付けるためのプログラムなんです…と言い切れるようになっていくのが、私たちの組み立てているものなので。熊本の大学や企業との繋がりがまで完成されていくと、どんどん受け入れられていくのだらうと思います」。

谷さん「子どもたちにとって、よその土地を訪問して、その課題と向き合ったり解決のヒントを考えることは大事な学びですが、考えることを身につけること自体が本来の教育とか学校現場での研修旅行の目的となるのではないかなと思っています。そういうことを考えると、学校さんにも提案しやすいとか、感度の高い先生は関心を持たれるのではないのでしょうか」。

玉木さん「地域性もあるのですが、東京や大阪の学校はかなり進んだ試みをやられているようです。先日聞いたのは、修学旅行が8コースに分かれている学校があるということでした。日本全国の課題を学ぶ8つのコースが設定されていて、選べると。このような変化を生んでいる要因の一つは教育改革、もうひとつはSDGsが注目されているといったムーブメントではないのでしょうか」。

谷さん「今、コロナの影響もあって、近くで安全性を確保しながら学びが多いところへの旅行を実現できるか……という動きになっています。『新しい目的地や企画』を開発したり提案したりするタイミングではないかと個人的には思っています。現在、コロナ禍でインバウンドの取り扱いが見込めなくなっていますが、そもそもインバウンドは不安定な要素を含んでいます。テロや災害、国際情勢によって大きな影響を受けますから。国内客を対象として、いかにニーズを開発し、商品化していけるか、地域に求められているのではないのでしょうか」。

(5) ツーリストの役割そのものが変わりつつある？

玉木さん「もちろん前年踏襲型の学校は多く、京都型の修学旅行のニーズも高いのですが、『新しいスタイルの修学旅行』を求める学校は増えています。そのため、私たちも地域の皆さんと一緒にコンテンツを作っていくことが多くなっています」。

谷さん「私たちの会社も変化していて、以前は『福岡のお客さんをどれだけ他の地域や海外にご案内するか』ということばかりを考えていたのですが、ここ数年かけて『全国の方をいかに福岡エリアに呼び込めるか』という商品開発やプロモーションなどに力を入れています」。

変わっていかねばという危機感があります。地元で営業していれば、福岡の企業や自治体の皆さんから『修学旅行はどこに行ってるの?』では

なく、『最近、福岡の宿泊人数は増えてるの?』と聞かれることが増えていますから。商品開発にもっと力を入れる必要がありますし、地元の新聞社さんや企画会社や宿泊事業者さんや体験施設さんなど多岐にわたる皆さんたちをいかに繋いで、いかに商品化・事業化していくのが、私たちの仕事になっていきます」。

玉木さん「私の場合には学校の先生と近い関係ですから、『こういうプログラムで』という話があれば、先生方と『こんなエッセンスを事前学習に入れて』とか煮詰めて、事業費を算定していきます。私の強みは人脈があること、そしてお客さんに近いところにいますから、いろんな方々と要望をぶつけ合うことができるということでしょうか」。

(6) 農泊地域に向けてのアドバイスはありますか？

玉木さん「地域が誇れる資源はまず『歴史』だと思えます。都会であれば楽しい施設はたくさんあります。地方には何があるかと言うと歴史。土地の偉人だったり、スポットを当てられる場所。ここに来るとこれが学べるというのは、歴史的背景が一番大きいのではないかと私は感じています」。

谷さん「ツーリスト側からいうと、単発型ではなく『継続型』の企画がありがたいですね。また、こういうコンテンツは一つの業者さんでは完結できず、いろんな業種や人々を巻き込んで完成するものですから、『地元の方々の合意形成』ができるかというのも大事です」。

そして、キャパシティの問題も大事です。バス1台なら40人ですが、『うちの施設は20人から』となるとコンテンツそのものが成立しなくなるということもあります。あるいは、3つの事業者が集まって成立するコンテンツがあって、AとBは『いつでも受け入れOK』に対して、Cは『うちは体力ないし、週2回までが限度』となったら、その商品は週2回までしか設定できない。そういう時には利用者（お客さん）側とのマッチングが難しくなりますね」。

玉木さん「旅行商品の安全性や安定性から考えれば、ホテルさんに一括でお願いするのが安心です。一方、『農泊』には独自のメリットがあり、そのメリットを感じておられる学校が要望されるのでセティングします。農泊をより多く営業したいということであれば、いかにリスクを低減していけるかがひとつのポイントになると思います」。

谷さん「自治体の皆さんへの要望としては、旅行会社へのインセンティブです。GOTOトラベルなど旅行者へのインセンティブや施策はいろいろありますが、併せて旅行会社へのインセンティブも付けていただくとより売りやすくなると思います」。

例えば『うちの温泉地に宿泊されたら、市が貸し切りバス1台あたり5万円を助成します』という施策があるとして、これはお客様向けの施策です。手続きは旅行会社がしますが、メリットを受けられるのは利用者です。そこで事務費のようなものを旅行会社に出していただけると、紹介しやすくなるというケースは出てくると思います。特に地域の少人数の旅行会社さんなどは非常に厳しい時代ですから意識されると思いますし、大きな動機づけになると思います」。

(7) 福岡県朝倉市「山田堰」の修学旅行誘致の事例

このインタビューの中では語られていませんが、事例として「朝倉市」の話があります。福岡県朝倉市には筑後川が流れていますが、「山田堰」という用水路へ水を誘導する調整堰があります。これは江戸時代、手積みの石で作られました。アフガニスタンで活躍された故・中村哲さんは現地で治水事業を行われていましたが、これらは山田堰を参考にして行われたという話です。

アフガニスタンのような地域に海外の支援チームが訪れて土木工事をを行った場合、工事が完了して支援チームが帰国してしまうと、現地ではメンテナンスができなくなる（機械を操縦できない、工法が難しいなどの理由で）ケースがあります。そこで中村哲さんは江戸時代から日本で用いられていた石積みの堰づくりの手法を山田堰から学び、アフガニスタンに導入しました。この手法だと現代土木技術を持たない現地の人々でも修復工事が可能なのです。

JTB 福岡支店教育旅行センターではこの話をもとに、「山田堰」「中村哲さん」「水資源」「アフガニスタン」などをつないだストーリーを設定し、そのフィールドワークとして朝倉市への修学旅行誘致を行ったということです。情報収集や資料制作などは西日本新聞社、写真提供や現地の情報提供はペシャワール会などの連携・協力によって行われ、JTB はそれらのネットワークをつなげる役割も果たしたとのこと。

近年、教育旅行の商品造成にあたっては、このような大きなテーマを据えたストーリー（＝学校での教育プログラム）の構築を行い、そのフィールドワークとして現地への体験旅行を位置づけるということが行われています。受け入れ地域側からもストーリー構築を踏まえた（前提とした）提案があれば旅行商品として実現できるのかということお話でした。

「山田堰」と「中村哲医師のアフガニスタン治水工事」とを結びつけた教育旅行のテキスト（抜粋）



第3章
調査結果のまとめ

最後に本調査で得られた学びを整理しておきたいと思います。

3つの先進地域はそれぞれ環境や取り組みの目的・内容が異なっています。自分の地域には関係ないと思われる部分もあるかと思いますが、地域が置かれた環境や資源に応じて個性化を図ろうとする点や来訪者の受け入れ促進を活動の中心に置こうという考え方は共通しており、熊本で農泊に取り組んでいる皆さんにも参考になるのではないかと考えています。

1. 農泊：農泊のスタイルと可能性

今回訪問した3地域はそれぞれにスタイルやその背景にある考え方（思想やコンセプトと置き換えてもいいでしょう）が異なっています。

農泊の老舗である安心院町 GT 研究会における農泊は、主に小学生～高校生の修学旅行や体験旅行をメインターゲットとして発展してきたもので、都市の人々（子どもも大人も）が田舎で過ごすことで癒やされたり自分を見つめ直したりする機会を提供しようとするものです。一方で、ヨーロッパ研修で学んだ農泊の思想は、「農村の維持」という大きな目的が中心にあります。都市と農村との共存というビジョンがあり、そのためにリゾート法も含めた国や自治体の役割が重要視されています。

くらたび臼杵における農泊はもっと旅行プログラムの色彩が強くなります。都市と農村という対比ではなく、国内外を問わず「個性ある農泊」を求める人々へ向けた「選ばれる旅行プログラム」として完成度を高めたいという印象です。このことは同時に農泊家庭にとってもよい刺激であり成長の機会として有益だと語られています。そして、くらたび臼杵の目的は「地域（臼杵）の活性化」であり、そのための関係人口増加の一つの要素が農泊だといえます。

大島・渡海屋はゲストハウスの開発を取材しましたが、国内の富裕層、海外からの来訪者、より一般の観光客といった多彩なターゲット像を描き、そのターゲットに合わせた商品（ゲストハウスやサービス）の開発を推進しています。農家・農村という枠組みにとらわれていないため、より旅行商品として位置づけがはっきりしています。ただし、渡海屋でもその取り組みの目的は、ここの事業の成功ではなく、大島という過疎化が進む離島の活性化であり、島内に働ける場をつくるということが掲げられています。

熊本だけではなく、農泊や旅行商品開発ということに取り組む場合、どのような目的を掲げ、どのようなスタイルを選んでいくのが重要になるのだらうと思いました。

2. 人材：3つの地域に共通するリーダーと現場のキーマンたち

3つの地域はそれぞれ異なるスタイルを選びました。では、その選択はどのように行われていったのでしょうか。

3つの地域に共通しているのは、誰か一人の設計によるものではなく、人と人が出会っていくことによって、思想もターゲット像もスタイルも作られていったということです。

安心院町 GT 研究会は宮田静一会長と津端修一氏との出会いがなければそもそもヨーロッパ研修は行われませんでしたし、くらたび臼杵も平林真一会長と藤沼美和事務局長や個性的な農泊家庭のホストたちが出会わなければ現在の形は成立していませんし、藤沼美和事務局長の人脈や語学力がなければオンライン農泊も始まっていないでしょう。大島・渡海屋においてはメンバー4人の絶妙な組み合わせがなければ事業化までたどり着いたか疑問です。つまり、人と出会っていくということがプランを後押ししたり、事業を推進していくきっかけであり、エネルギーだといえます。

もう一つ、人材に関係する3地域の共通点があります。それはリーダーとキーマンの組み合わせの妙といったことです。

安心院町 GT 研究会は宮田静一会長というカリスマが大きな柱として存在しつつ、「百年乃家ときえだ」の時枝仁子氏のような現場のキーマンが事業を支えています。この場合、現場のキーマンとは単に役割分担というだけではなく、安心院の農泊そのものの魅力・個性になっていると言えます。

くらたび白杵も平林真一会長、藤沼美和事務局長、そして現場のキーマンである足立完治氏たちが見事な組み合わせになっています。

大島・渡海屋も、人柄がよく整骨院での施術で直接島の人々とふれあっている田中誠一代表と、田中誠一代表の意志をわかりやすく整理し、外部の人（来訪者など）とのコミュニケーションを担当する谷口竜平氏というコンビネーションが基本になっています。

思想・企画、リーダーシップ、現場のディレクション、情報発信など、農泊の組織運営には多様な役割が必要で、これらを一人が担うのは困難です。いかに有益な人材と出会い、チームを組んでいけるのが重要な作業だと言えるでしょう。

3. 戦略：あるがままの魅力の提供と運営に必要な戦略と計画

戦略のあり方については、3者3様でした。

安心院町 GT 研究会は、大手旅行会社などとの連携を行うことによって、全国エリアからの多人数の修学旅行誘致の受け入れを実現し、継続できる事業として発展させてきました。その需要に応えるため、多くの農泊家庭を育て、やがて大分県全域へと受け入れキャパシティは拡大していきました。

くらたび白杵は、コロナ禍によって本格稼働ができない状況が続いていますが、発足当初から海外からの観光客誘致を大きな戦略として持っています。農泊家庭の人々もインバウンド受け入れ経験が豊富で、現在、海外に向けたより魅力的なツアープランを構築するために、広域圏での連携を模索しています。

大島・渡海屋は、富裕層向けの1棟貸しゲストハウス「MINAWA」や一般&インバウンド向けのリーズナブルな民家ゲストハウス「TOKAIYA」などターゲットごとに設備や料金の異なる商品開発を意図的に行っています。

いずれも持てる資源の特性や営業チャンスに合わせて、可能性が描ける戦略を立案・実施していると言えます。

ところで、安心院町 GT 研究会の宮田静一会長は「ここは何もない、あるがまま」といった表現をされていますが、決して「あるがまま」ではありません。安心院町 GT 研究会は農泊家庭における人材育成に熱心で、実践大学という学びの機会を提供し続けていますし、「農泊は地域おこしではなく仕事なのだ」と明確にしています。

くらたび白杵や大島・渡海屋にしても、農泊家庭や民家ゲストハウスは一見「あるがまま」に見えて、ちゃんとトイレやバスルームはリニューアルしてあるのです。来訪者が快適に楽しく過ごせるよう必要な配慮は行う、これも大切なポイントです。

4. 物語：旅行や観光には、背景、ストーリー、プログラムが必要

3つの地域にもそれぞれの物語や背景がありますが、株式会社 JTB 福岡支店 教育旅行センターが現在取り組まれている教育旅行における「旅前・旅中・旅後」という考え方も「旅行の物語性」という意味で重要だと思います。

熊本は歴史的な物語性も豊富ですし、自然や農林漁業は阿蘇のジオパークや世界農業遺産を始めとして多くの財産があります。「山田堰」の事例のように、地域の側から情報発信し、旅行会社や自治体が動いていくといった成長の仕方も十分な可能性があると思います。

5. 個性：人を惹きつけ刺激する、成長する好奇心あふれる人々

今回訪問した3地域はいずれも魅力的でした。機会があればまた伺いたいと思います。その時、頭に浮かぶのは安心院町のぶどうでもなければ臼杵市の城下町でもなく、大島の海でもありません。やはり、快く迎え入れていただいた地域の人々、特にホストの方々です。

なぜそう思うのかというと、いずれの地域もホストの方たちが個性的で魅力的だからです。もっと具体的に言うと、好奇心を失っていない人たちなのです。自分たちで成長していこうという生き方を止めていない人たちなのです。だから刺激を受けますし、会話していてもその言葉が生きています。この人にまた会ってもっといろんな話をしてみたいと思うのです。

もっとも、この感じ方は人によって異なるかも知れません。評判の良い農泊地域にはどこでもきっとそういう人々がいるのだと思います。そうでないとリピーターは生まれられないでしょうから。

6. 交流：人と情報が行き交い、新しい価値を生む、ネットワークの力

人と人が出会って事業が生まれ育ったということは先に述べました。それともちょっと繋がりますが、情報とネットワークの大事さも今回の訪問で感じるが多かったです。

3地域ともに情報を事前に把握したのはウェブですし、取材の申込みや事前相談したのはメールです。ウェブはホームページだけではなく、SNS なども広く検索し活用しました。逆に言うと、これらの情報発信が行われていなければ地域の情報自体をキャッチできませんでしたし、メールのレスポンス（返事）が円滑でなければ組織として信用できなかったでしょう。情報の取り扱い方などには十分な注意や配慮が必要です。

また、くらたび臼杵における「ピーティックス」や大島・渡海屋における「エアビー」の活用がいかに効果的だったかはレポートしたとおりです。

さらに、くらたび臼杵における「オンライン」の活用の面白さには今回驚きました。コロナ禍ゆえの情報発信の一つとして理解していたのですが、その予想を越えて、「交流」の意味合いが強いようでした。たとえウェブ上とはいえ、互いに顔を見合って、互いの紹介をし合えば、それはもう人の交流です。

くらたび臼杵では、このような交流の積み重ねによって、海外と結んだオンラインツアーの試みが生まれていますし、コロナ禍が終息すればさまざまな成果を生んでいくでしょう。

もちろん、リアルでの交流の重要性は言うまでもありません。安心院町 GT 研究会の宮田静一会長が「GT実践大学を実現するまでに10年かかった。それまで各地で人脈づくりという人の貯金をやった」とおっしゃることの重要性です。

7. 視点：商品開発も接客対応も情報発信も、大事なのは外からの視点

これも3つの地域に共通するものとして、「外部からの視点」があります。

安心院町 GT 研究会の宮田静一会長、くらたび臼杵の藤沼美和事務局長、そして大島・渡海屋の4人のメンバー、いずれも地域外からの流入者です。宮田静一会長は「よそ者を大事にしてください」とおっしゃいましたが、地元の人たちだけでは固定観念と既存の人間関係に縛られて自由に発想したり行動したりできないところに、風穴を開けたり、意外な発想を持ち込んだりできるのが「よそ者」の強みです。

一方で、「よそ者」だけでは排他されやすいというリスクもあります。地域外の人には地元の人との信頼関係、同志的なつながりが必要なのです。場合によっては、地元の人々が地域外の人を意図的に迎え入れることもあるでしょうが、その場合には、地元の人々によって活動しやすい受け皿や環境を用意してあげる必要があると思われる。

8. 挑戦：ウィズコロナ、変化していくニーズへの新たな取り組み

今さら言うまでもなく、新型コロナウイルス感染症の蔓延はさまざまな産業や私たちの生活に多大なダメージを与え続けていますが、特に人流やふれあいを糧としてきた観光業にとっては未曾有の災厄となりました。

3地域も旅行会社も大きなダメージを負いつつ、新たな取り組みを行っています。

安心院町 GT 研究会は、「リゾートホテルとの提携による営業機会の増大」や「スッポン料理の提供による客単価の増大とターゲット層の拡大」を図っています。

くらたび臼杵は、「オンラインの活用による新規顧客の開拓や海外とのネットワーク開発や人脈づくり」を行いつつ、「広域連携によるツアープログラムの開発」を計画しています。

大島・渡海屋は、「人流を避けられる離島のゲストハウス」として限定された営業を行いながら、「テーマ性を重視した健康合宿プログラム」などの開発を行っています。

これらの取り組みのうちどれが成功するのかわかりません。しかし、実際に現場を見て、取材させていただいた感想は「無駄にはならない」です。いずれの試みもその検討・計画プロセスの中でいろんな経験を行っています。この経験の積み重ねが必ず次の時代の血肉となるのだと思います。

9. 訪問：実際に農泊家庭で宿泊し、語り合ってみることの大事さ

今回、訪問取材を行ってみて、あらためて現地を知り、現場の皆さんとふれあうことの大切さを再認識しました。特に、新型コロナウイルス感染症の拡大の下での各地のさまざまな取り組みをより深く学ぼうとすれば、現地を訪問することが第一だと考えます。

また、「交流」「人脈」をつくるという意味でも訪問は大事です。そこから新しいチャンスが生まれるかもしれませんし、新たな商品開発のアイデアと出会えるかもしれません。

コロナ禍の影響でどの地域も来訪者を求めています。訪問すれば喜ばれますし、次には熊本に来ていただけるかもしれません。これも一つのチャンスだと捉え、気になる地域を探してご訪問されてはいかがでしょうか。



令和3年度農泊地域先進事例調査

農泊先進地域 レポート



農泊先進地調査ビデオレポート(動画版)をご覧になりたい方は
下記へアクセス！



あるいは

ふるさと応援ねっと

検索

発行者:熊本県
所属:むらづくり課
発行年度:令和3年度(2021年度)